死を許す深い仲を、傍で見て嫉むのではない、死の運命に落ち行く男女の粗末な命を嘲るのであらう、助けらるべき人を見殺しにする其處に一種の痛快な感じを以て、龍之助は人を殺したあとで見する冷笑を浮べて寢ころんで居るのです。

『死ね、死ね、死にたい奴は勝手に死ぬが宜い』

心の中では、こんなに叫んで居る、それでも何だか後からついて來るものがあるやうです。

二

その晩は無事に寢て、翌朝、隣の室が騒々しいので、龍之助は朝寢の夢を破られました、あゝ、昨夜の男女の客は――惜しい寶を石に落して碎いたやうな氣持がしないでもない、途切れ〳〵の話と、すゝり泣きの聲を耳にしながら、ウト〳〵と寢入つてしまつて、其の後の事は知らない、隣の室では人が入つたり出たり、廊下を駈たり、階段を蹴たり、私語いたり叱つたりする、思ひ合すれば慥に變事があつたに相違ない。

龍之助は別にそれを確かめても見ず、やがて朝飯の膳に向ひます

『昨晩から定めて、お喧しうございましたらう』

『何だ』

『まあ、お隣の騒ぎを御存知なされませぬか』

『知らぬ』

給仕に出たのは、丸い顔の氣の好ささうな女中、あの騒ぎを、隣室に居て龍之助が、ほんとに知らないらしいのを不思議がり、

『宵の口に、若い御夫婦づれが、これへお出でになりました』
『それは知つて居る』
『その御夫婦づれが、心中をなさいました』
『心中を』
『はい、吾妻川の湖へ出ます處で、二人共、しつかり抱合ひ、身を投げたのを、今朝の暗いうちに、倉屋敷の舟夫が見付けまして、大騒ぎになりました』
『うむ――』
『宅の方は、昨晩、三井寺あたりまで參ると申し、五つ過ぎに、連れ合ひしてお出かけになりましたが……それつきり、心配して居りますると、吾妻岸に身投げがあつたとの噂で、男衆が駈けつけて見ますれば、案の定、宅の客人でございました』

『うむ』
『お醫者を呼んだり、お手當をして戴きましたけれども、すつかり息が絶えておしまひなすつたのでございます』
『ふむ』
『兎も角、宅でお引取申すことになり、檢死を受けまして、やがて、これへお連れ申すので……』
『不憫な事をしたな』
『ほんとに、お可憐相でございますよ、まだお若いのに、何といふ無分別でございませう』
『何處の人じや』
『宿帳には、京都三條下る……何とか書いてお出でゞざんした、おゝ、あの遺書もちやんとしてありました、昨晩のうちに認めて置い

たものと見えて、お室の床の間に二通並べありました」
『遺書には何と書いてあつた』
『お役人衆がお出でになり、手前共主人も立ち合ひまして、封を切つて見ますると、お二人は、夫婦ではないのださうでございます』
『夫婦ではない』
『はい、親戚同志とか「いとこ」同志とか申すので、それには色々の縁が絡んで居るといふのでございますよ、女のお方は伊勢の龜山にお實家が、お有なさるとやら。どうも、たゞの色戀ばかりではないのださうで……』
龍之助が食事を終つても、女中は調子に乗つて、話し込んでしまひます
『その遺書の中には、男の方のお妹さんが都の島原へお賣られなすつたとやら、御承知でもございませう、島原は色町でございます

る』
『うむ』
『それを大相悲しんで、家のつぶれたのは不運と諦めもするが、妹の身が不憫じやと、それを細々と書いてお詫に致してありましたさうな』
『うむ』
『お家は相當の大家なさうにございますれど、盗賊に入られましたのが不運の元で……お武家様、この頃、都の盗賊と申しましたならそれは〳〵怖ろしい事で、御用心なされぬといけませぬ』
『盗賊が――』
『左様でございます、何にしても亂世でございますから、盗賊も大

袈裟で掛矢の大槌を以て、戸を表から押破つて亂入致し、軍用金を出せ、軍用金を出せと嚇しまするとやら』

『うむ』

『その外辻斬は流行る、女の子は手込にされる、京都へ近い、このあたりでも、ほんとに氣が氣ではありませぬ』

『うむ』

『あれまあ、人が見えます、駕籠が二挺、あれが、昨夜の若夫婦でありませう、お武家様、御覽遊ばせ、まあ、お可哀さうに』

手欄の間から外の方を覗いて居た女中の聲が慌ゞしい。

三

今の京都は怖ろしい處。

それは女中共に聞くまでもなく、龍之助は好んで其處へ行くである今京都に群がる幾萬の武士、それを大別すれば、佐幕と勤王。

德川を擁護するのと、それを倒さうとするのとが、天子在す處で揉み合つて居る——その間に絡まるのが攘夷。

志士を氣取つて勤王を看板に、惡事を働らく厄介者。

暗殺が流行る、お互に目ぼしい奴を、切り倒して勢力を殺ぐ、京都の町には、生首がごろ〳〵轉がつて居る、新に守護職を承はつた會津中將の苦心といふものは一通りでない。病軀を起して、この內憂外患の時節に、一方には、倒れかけた幕府の威信を保ち、一方には諸國の頑强な溢れ者を處分して行く、惡まれ役は會津が一身に引受けたのであります。

會津侯の手に屬して、これ等勤王の志士、多くは西國諸藩の武士に當るべく、彼の新徴組が、江戸を發したのが文久三年の二月八日でありました。

德川は、全く下り坂で、旗本も腰が拔けてしまつた、關東の武士も今は怖るゝ處はない、たゞ新徴組の一手と――それに東北の質樸な國侍に齒ごたへがある。

その新徴組の中で、最も怖れらるゝ近藤勇、土方歳三等は、もと德川の譜代でも何でもない、六十餘州の兵に當ると、昔から謠はれた東國純粹の風土の鍛錬を、生れながらに受けたのみで、持つて生れた剛膽の氣象と、學び得た劍道の精妙が、成敗を外に見て、志士の假面を蒙つた無賴漢退治に當らうといふのであります。

折柄關東武士の面目といふものは、旗本の間にも無く、譜代大名の中にも無く、辛うじて彼等田舍武士の間に殘つて、そして潮の湧くやうな意氣組の西國武士に當ることになつたのです。

机龍之助の如きは、勤王家でもないし、佐幕黨でもない、近藤土方のやうな壯快な意氣組があつてゞもない、……大津を立つて比叡嶽が輕く面を撫でる時、龍之助は、旅の憂を、すつかり忘れて小氣味よく、そして腰なる武藏太郎が自ら鞘走る心地がして、追分へかゝらうとする時、ふいに、後から呼び止める聲がする。

『それへお出での御仁、暫らく』

顧みれば、筋骨逞しい武士が一人、靜々と歩んで來る、外に人もないから呼び留めたのは自分の事であらう

『お一人旅とお見受け申す』

黑の着物に、小倉の袴で高足駄を穿き、鐵扇を持つた壯士、小刀の

短い割に、刀は四尺もあらんと思はれる大きなのを横にさし、頭の頂邊から、龍之助を見下ろして、進んで來たので、

『如何にも一人旅』

龍之助も、それを睨み返すやうな氣持で、例の無愛想な返事です。

『拙者も一人旅、御同行が願ひたい』

『何れへお出であるな』

『京都まで』

『いかさま』

「柳綠花紅」の札の辻を、逢坂山を後にして、極めて人通りの乏しい追分の道を、これだけの挨拶で、兩人は口を結んだまゝ、龍之助の方が一足先きで、高殿の武士はやゝ後から、進み行くこと數町。

龍之助は、旅に出ても、こちらから人に話しかけた事もないし、同行を求めた事もない、わざ〳〵後から、我を見かけて呼び止めて同行を求めた此の武士には、どうも油斷がならなかつた。

自ら經驗のあるものでなければわからない、龍之助の如き者から見れば直ぐ知れる事だが此の武士は、好意で自分の道連になつたものでない、手つ取り早く云へば、自分を斬りに來たものである——近寄る時に、其の人の心持ち次第で、和氣も受ければ殺氣も受ける

『何れからお出でござるな』

壯士は問ひかけた、

『關東より』

『關東……關東は何れの御藩でござるな』

『浪人者でござる』

『して、何れの藩の御浪人』
『生れついての浪人でござる』
『生れついての浪人――』
壯士は、鼻の先に少しく冷笑を浮べて、
『武藝修行でござるかの』
『左樣でござる』
『武藝は劍道か、槍術か……但しは』
『劍道でござる』
『劍道は何の流儀を究めなさるな』
壯士は突ッ込んで龍之助に問ひかけるので、龍之助は之を五月蠅がります。
『貴殿の御流儀から承はりたい』

『如何にも、拙者は先づ自源流を學び申した』
『自源流！』
『關東にはお聞き及びもござるまいが、薩州伊王ケ瀧の自源坊より瀬戸口備前守が精妙を傳へし譽の大刀筋』
『いや、豫てより承知してござる』
劍道の話のみは、龍之助の氣を嗾る唯一のものです
『して貴殿は鹿兒島の御藩でござるか』
『如何にも、以前は島津の家中、今は天下の素浪人』
『左樣でござるか、薩州は聞ゆる武勇の國、高名のお話なども多いことでござらう』
『薩摩武士の高名が知りたくば――』
ッと思う間に、密着いて居た二人の身が、枯野の中に横へ飛び退

いて、離るゝこと正に三間です。

四

飛び退いた時に、雙方共に刀の柄に手がかゝつて、そして何云はず睨み合ひです、刀は共に未だ拔かず、龍之助は、この大膽なる壯士の擧動を、物々しと思つた、この俺を、彼の大菩薩の頂で老巡禮に遭はせたと同じ運命に逢はさうとは片腹痛い。

蒼白い皮膚の色に、眞珠のやうな光を見せて、切れの長い眼は、すーつと一文字に冴える、人を斬らんずる時の龍之助の表情は、いつもこれです

『薩州鍛冶の燒刃をお目にかけようか』

壯士は、大の眼で、龍之助を睨めながら、彼の四尺もあらん刀の柄を丁と打つ

『篤と、拜見致さう』

まだ雙方共に拔かなかつた

『待て、待て、ちと齒どたへのある勝負がして見たいは』

彼の壯士は龍之助の氣勢を見て却て喜んだ。腕に覺えがあればこそ刀の拔きばへのある對手と見込んだものでせう

『悠くりと、尋常の果し合ひを致さうではござらぬか』

『尋常の果し合、それは至極面白からん』

龍之助は、微笑を以て、言下に果し合ひの申込を引き受けて、その微笑の餘沫を、冷やかに壯士の面に投げる、壯士も剛膽なもので、從容自若として、懷中から紙を取り出して、

『後日の爲に一札を立て置きたい、筆はないか』

龍之助は默つて、矢立を出して壯士に授けます。筆の尖を口で嚙んで、壯士は紙に太く書き出したのは

仲裁無用
果し合

味なことをやる

何にしても、こゝは往還に近い、燒刄の音を聞いて、駈つける者の中には、餘計なお節介が飛び出さんとも限らぬ、この札を立てゝ豫め豫防線を引いて、一方が一方を片附けるか、雙方共に仆れるかまで、無名の帥をやり通さうといふ準備であらう、兎に角物慣れた仕業である。

龍之助は冷然として、其の書き終るを見て居ると、壯士は其の紙を持つて前後を見廻したが、傍に大きな松の樹がある。小柄をぬいて、其の一端を突きさして、あとの隅を刻明に松脂で押へる

『いざ、お仕度召されい』

『心得て候』

壯士は、刀の下げ緒を襷にする、龍之助は笠を取つて、これも同じく刀の下げ緒が襷になります。

驚くべき長い刀の、鞘を拂つて、上段にとつて、曳と叫ぶ、隨分大きな聲です。熟練した立合ぶりです。其の伎倆の程はまだ知らないが、立ち上つて、先づ大抵の人の荒膽を挫ぐといふやり方、何にしろ眞劍の立合を茶飯のやうに心得たものでなければ斯うは行かない筈であります。

一方、龍之助は、同じく拔き放つて、これは、氣合もなく、恫喝もなく、縱一文字に引いた一流の太刀筋、久しぶりで「音無しの構」を見た、無名の帥、尋常の果し合は、仲々骨が折れる、まして、敵の容子が、海の者とも、山の者ともわからない場合に於て、得意の構えに、身を守り敵を窺う瞬間は、いづれも氣が張るのです。焦き込みもせず……無言の儘で、青眼にとつた刀、此方が嚇しても手答がない、叫んでも反響がない……自ら薩州の浪人と名乘る壯士は、龍之助の太刀振りに、やゝ意外の念を催します。

道具をつけての稽古ならば、體當りで微塵に敵の陣形をくづす、一か八かの初太刀を入れて見る、當れば血を吸ひ骨を啖ふことを好む燒刄と燒刄とではさうは行かない。

壯士は、上段の刀を振かぶつたなりで頻りに氣合と恫喝とを試みて

龍之助の陣形を覗うて居るが、其の靜かなること林の如く、冷やかなること水の如しです、打ち込んだら、此方の何處かへ來る、それが何處へ來るか、さつぱり見當がつかぬ、淺く來るか、深く來るかさへ見當がわからないのです。

時節柄、人の通りが少いと云つても、名にし負う京と大阪とへの追分に近い處

『あれ、喧嘩があるさうな』

『武家と武家との爭鬪じや』

『おゝ、拔きましたせ』

『拔いた、〳〵』

『長い刀やな』

『あれ、危ない』

氣の弱いものには、眞劍勝負は見て居られない、袖で面を蔽うて、急いで通り去るのが尋常の人です、怖い者見たさの連中のみ遠巻きにして――それとても息を凝らして、片足は逃げられるやうに、スワといふ時、腰を拔かさずに走れるだけの膽力を持つたものに限るのです。

白晝、白刃の立合は、恐らく凄いものゝ頂上でありませう、月にかゞやく刃の色、星にきらめく兜の光などは、殺氣を包むに充分の景情があります、こゝには、人と人との血氣、劍と劍との殺氣、それが、全く露出に、青天白日、八百萬の神の照覽ます處に於て行はるゝのであります、殊に、龍之助を知つて、その面の刻々の變化――變化と見えざる變化を見分ける人があるならば、何者とも知れず、來つて八萬四千の毛孔を搔つて行くとや疑ふであらう。

この立會を、ながめて居たものゝ中に、一人の物好があります。最初は拔からぬ顏で、人の後に立つて居たが、ヂリ〳〵と一足前へ、二足前へ、餘の連中が、一寸二寸と後へ下がる間に、この男のみは知らず〳〵前へ出て行くので、水が流れて、岩が自ら進むやうに見えます。

「仲裁無用」

彼の松の樹の貼り札の下まで來て、突立つて、凝と此の果し合を見て居る、脚半足袋草鞋、菅笠は脊中に、武士ではないが、マンザラ町人でもない――手に四尺五寸ほどある樫で出來た金剛杖擬ひものをついて居ました。

世間には、樣々の變人がある、好んで危きに近寄るは變人の中の愚なる物

壯士の額には漸く汗が滲んで來た、それと共に氣がヂリ〳〵と焦出すのがわかります、この時、龍之助の足許が心持ち進む。壯士の踵が心持ち退く。上段の太刀を徐に下ろして、中段に直します、

「構えの如何に頓着せず、立合ふや直に、手の内に切り込み、其の儘腹部を目がけて突き行けば必ず勝つ」とは、千葉の道場などで、よく敎へた立合の秘訣で、機先を制して、勝を咄嗟に極めるか、さも無ければ、壘を高くして持久戰の覺悟を定め、さうして後に根氣で勝つ、壯士は最初の法をとつて、勝を一氣に占める考へであつたが、その術を施す隙が無かつたので、已むを得ず、相方共に、楯をついての睨み合です。

關東の劍客で、その立合つた限りに於ては、龍之助の音なしの構を

破り得るものが無かつたのです、破の壯士は圖らずも其の術に引かゝつたものです、降りみ降らずみ五月雨の空が、十日も廿日も續く時は、大抵の人が肝癪を起します、鬱陶しい、忌々しい、さりとて雷が鳴るまでは、どうにもならぬのが龍之助の劍術振りです。壯士の肝癪は遂に雷となつて破裂した

『やあ』

切り込んだ初太刀

その出る頭こそ音無し流の覘ひ處です。

どちらが斬つたか斬られたか。刀と刀は火花を散らして、一合すれば、兩人の身は四五間を離れて飛びます。どちらにも怪我はなかつた、透さず壯士は再び上段の構へで、ヂリ〳〵と寄る、龍之助は、元の如く、雙方共に以前の形をとつて進むだけです。

この一合した時に、立つて居た怖い者見たさの連中は、

『喚！』

とわめいて、横になり縦になつて、遠いのは一町近いので五十間も轉げ出したが、雙方共に傷つかず、また陣形を立て直したのを見てソロ〳〵と舞戻る。

棒を杖いた、商人體の不思議な人物のみは、自分が檢査役かの如き氣取で、平然として元の立場を動かず。その癖、兩陣の爭ひはいよいよ其の身に近くなつて來てゐます。

壯士も、膽氣一方の人ではない、術も充分である、相撲ならば、四ッに組んだので、水を入れ手がない以上は、取り疲れて、死ぬまで組む、力限りの爭ひかと見れば、意外にも今度は目に見えないほどゞゝ、龍之助の太刀先が進む、

進み、進むと、壯士は脂汗をダラ〳〵と、再び中段にして、ヂリヂリと退く、その退くこと五分なれば、龍之助の進むことも五分、一寸なれば一寸。

音もなく、飛んだ刀は壯士の小鬢をかすめて、再び燒刃の音の立つ時、壯士は鳥の如く後へ飛び退る、龍之助は、透さずそれを追ひかける、受けて、また後へ飛ぶ途端に、無慘や大の男は、石に躓いて撞と横樣に倒れる——この時まで壯士は足駄を穿いて居たものです倒れたものを、起しも立てず拜み討ち——誰が見ても、この運命はもう定まつた、倒れたのが斬られる、倒れないのが斬る（事實は必ずしもさうでないが）——その決勝點で、邪魔が入つたといふのは彼の棒を持つて居た變人が、

『待つた！』

流々と片手で振つた樫の棒に、仲裁無用の定規を破らせたことであります。

五

龍之助と、薩州の壯士と、棒を持つた變人と、三人の姿を、山科の奴茶屋の一間で見ることが出來ました、三人、丸くなつて、酒を酌みかはしながら、薩州の壯士曰く

『不思儀な流儀もあつたもんじや、異體が知れん、俺も一刀流の道場は、たんと廻つて見たがな』

棒を持つた變人は、龍之助に代つて

『うむ、この人の劍術は一流じや、手古摺らぬ者は珍らしいよ、關東の劍術仲間では音無しと名を取つたものでござる』

『成程、音なし、音なしに違ひはない、何しても珍らしい、關東には變つたのがある、ハ、、、』

高く笑ふ、

『西國にも隨分、變つたのがござるやうじや、貴殿のお差料なども其の一つ』

『うむ、これか』

壯士は、座右の長い刀を今更めかしく取上げて、

『主水正、正清じや』

『拜見致す』

型の如く鞘を拂つて、つく〴〵と見る、相州傳の骨法を正確に傳へた薩摩鍛冶の名物、龍之助も亦傍から凝と見て

『成程』
『國の習ひで、脱げば鞘を叩き割るのが、血を見ずに鞘へ納まつたは今日が初め、まあ仲裁ぶりに愛でゝ不祥するわ、時に貴殿のは』
龍之助の武藏太郎、これも如法に見納めて、
『切れさうだ、大分血を嘗めとるな』
『今日も一抔、嘗め損うた』
『ナニ、嘗め損うたと、それは此方の云う事じや』
二人は面を見合つて笑ふ、壯士のは、明けつ放しの笑ひ方、龍之助のは苦笑ひ、
『何にせよ、二つの獲物をさつて押えたのは俺が棒の手柄』
商人體の變人は、塵敷の隅に横目をくれながら、云ひ出すと、壯士はそれを見て、

『あれは何じや、不思議な棒だな』
『この頃、大阪の相撲共が、毛唐の足拂ひと名づけて拵へよる、それを一本貰うて來た』
『ドレ、見てやる』
壯士は、立つて其の棒をさげて來た——これは力士小野川が水戸烈公の差圖により、次第によらば攘夷の先がけの爲とて、弟子共に持たせた樫の角棒。
打ちとけて、三人は飲み合つて、最初になすべき筈のを、いざ別る時になつて、名乘り合つて見ると、壯士の云ふに、
『拙者は薩州の田中新兵衛』
田中新兵衛は瓢然として、何處へか行つてしまつた。

あとに殘つたのは、龍之助と彼の變人、實は變人でも愚物でもない水戸の人で山崎讓、新選組の一人で、香取流の棒をよく使ひます。龍之助とは江戸時代からの知り合で、計らず、あの場へ來合せて仲裁を試みたもの。

田中去つて後、龍之助と山崎とは水入らずの舊知で

『時に吉田氏、其の後の雲行は、いよ〳〵穩かでないぞ』

『うむ、さうか』

『清川八郎が手で、新徵組の大部が江戸へ歸つた事は聞いたか』

『それは聞いた、横濱の毛唐を打ち攘う先鋒とやら』

『清川は食へぬ奴、何といふても新徵組第一の人物、これは敵も味方も許す』

『さうかも知れぬ』

『毛唐を打つといふも、實は江戸で事を擧げる、新徵組をダシに使ふて幕府を覘ふ奴じや』

『成程、彼奴は放つて置いたら豪い事をする奴じや』

『芹澤、近藤、土方等、幾度も彼奴が首を覘ふたが、運が強い』

『うむ』

『處が、天運めぐりめぐつて、つい此の間、首尾よく清川を討止めた』

『ナニ、清川が殺された』

『如何にも、芝の赤羽橋で、速見又四郎、佐々木只三郎等の手で、美事にしてやられた』

『奴も、千葉の高弟で、手は利いて居た筈だが』

『佐々木も、速見も、聞ゆる使ひ手じや、多勢で不意をやられては

溜るまい』

『うむ――さうすると新徴組は瓦解たか』

『壊れはせぬ、二つに割れた、最初江戸から京師へ上つたのは、總勢二百五十人、それは大方、今いふ清川が手で、江戸へ歸つて殘るは、芹澤と近藤を頭に十四人』

『うむ、僅か十四人』

『それが中堅となつて、新たに新撰組といふのを立てた、元の新徴組の返り新參もある、諸國から腕節の利く奴も集まる、壬生の南部屋敷に本營を置いて、芹澤鴨と近藤勇を隊長に、土方歳三と、新見錦山と南敬助とが副將じや』

『さうか』

『捕者も、こんな風をして、浪人共の捜索と、腕の利いた同志を探

しに歩いて居る、よい所で行き逢つた、早速壬生へ行かう』

『待て、待て』

龍之助は、直に壬生へ走せつける事について、多少考へねばならぬ事がある、

『芹澤と近藤との間柄は如何じや、二人共無事に組んで行けるかな』

龍之助に云はれて、山崎は眉根を寄せ、眼を光らかして、

『それだ〳〵、そこの雲行が危ないて』

『危ない』

『ドノ道、雨となるか風となるか、組の中にも芹澤派と、近藤派とは、油と水じや、困つたものじやて』

『生國から云へば同じ武藏、拙者は近藤派に好しみが深い、併し芹

澤には容易ならぬ恩がある』
龍之助は思案の體で、
『うむ、拙者も生國は水戸じや、芹澤とは同國、なれども、人物は近藤が一段上と思ふ』
山崎は、新選組兩隊長の器量を一寸ばかり比べて見て、
『どうも、近藤派の方が、人望があるやうじや、芹澤は亂暴でいかん、近藤は目先が見える、芹澤は人に嫌はれる、近藤は人に怖れられる……行く〳〵新選組は近藤のものであらう、成行に任せて、拙者は默つて見て居る』
芹澤鴨は水戸の天狗黨の一人です。芹澤鴨とは變名で、實は木村繼次といふ、同し水戸の山崎が見て、團扇を近藤に上げる處より見れば雙方の相違が自ら判るとも云へる。

『何れにしても、拙者は、これより壬生へ行くことは見合せ、程よき宿をとつて、窃かに芹澤と會ひたい、さうして身の振方を定める』
『さうか、まあ悠々都見物でもするが好い、隊へ入ると氣が忙しくなる』
『芹澤に、拙者が上つて來たと傳へて呉れ、近藤土方には、知らせたくない』
『よし、さう云はう、宿は何處へ取る』
『左樣、目立ぬやう、然るべき處はないか、周旋を頼む』
『六角堂の鐙屋といふのを拙者は知つて居る、それへ紹介しやう』
『宜しく頼む』
こんな話をして、酒を飲み合ひ、微燻を帶びて此の茶屋を出ると醍醐から宇治の方面へ夕暮の鴉が飛んで行く。

『それは、さうと吉田氏、京都へ入つたなら、滅多に刀は抜かぬがよいぞ、血の氣の多いのが、ウヨ〳〵居る、今の壯士のやうな奴が』

『あの命知らずには驚いた』

『併し、あんなのは珍らしい、全くの命知らずじや、さう〳〵、何と云つたかな、彼奴の名前は』

『薩州の田中新兵衛と聞いた』

『田中新兵衛、さうか　覺えて置くことだ、あんなのが好んで暗殺をやる、去年四條河原で九條家の島田左近を斬つたのも、まだ上らぬのじや』

『暗殺が流行るさうだな』

六

壬生の村から二條城まで、わざと淋しい處を選んで、通りを東に町を縫ひ、當もなく、辿り行く人影に見覺えがある。

まだ前髪立ちの少年なるに、腰には嚴めしき刀を帶し、時々は、扇子の要を、柄頭のあたりに立てゝ、思ひ出したやうに町並や、道筋それから仰いで、朧月の夜をながめてゐるのはいつの間に此の地へ來たか、其の人は宇都木兵馬であることに疑ひないのです。

世は混亂の時といへ、さすが、千有餘年の王城の地には佳氣があつて、町の中には險呑な空氣が立て罩めて、やゝもすれば嫉刀が走るのに、斯うして、朧月夜に、鴨川の水の音を聞いて、勾配の寛や

かな三條の大橋を前に、花に匂ふ華頂山、霞に迷ふ如意ケ嶽、祇園から八坂の塔の、眠れるやうに、清水より大谷へ、烟とも霧ともつかぬ柔らかな夜の水蒸氣が、ふうわりと棚曳いて、天上の美人が、甘い眠りに落ちて行くやうな氣持に、ひた〳〵と浸けられて行く時は、骨も自らとける心地がする。

朧月夜とは云ふものゝ、四月も既に半ば過ぎ、空の何處に月ありとも見えねど一帶に明るい。曇りにしては氣分が輕い、霽れにしてはしつゝとりとした、都の春の宵の色としては、申分のない夜でありました。

兵馬は橋の上へ來てから大事なものを踏むやうに、わざと悠くり悠くり歩いて居ます……朧月夜も深けて丑滿過ぎで、無論、人の通ることは、宵から數へるほどしか無かつたのですから、この深夜に

は誰憚るものもない、千金にも替へ難き都の春の夜を、一人占めにして、歩いてゐるやうなものでした。

京都に來ても兵馬は、ワザと罪無き人を斬つたり、喧嘩を買つて出たりすることはしなかつた。暇があれば、壬生寺の本堂に籠つたり深夜物騒な町を歩いて見る位のことで今までは至つて無事でした。

龍之助が、悠々と途中で、道場荒しなどをやつて、日數を多くかけて、京都まで來る間に、兵馬は新徵組と共に、一直線に此方へ來て居たので、京都の經驗は、兵馬の方が一月の餘も上であります。

すべての消息から、龍之助が京都へ落ちた事は眞實である、京都で必ず探し當る、これも兵馬が夜歩きをする一つの理由でありませう併し乍ら、京都へ來て見て、天下の形勢といふものを見たり、諸藩の武士の、國家を一人で背負つて立つやうな意氣込を見ると——

兵馬は、どうも知らず〳〵自分が大海へ泳ぎ出したやうな心持もするのです。

兵馬は此の夜浪人者が數人隊をなして一つの駕籠を守つて行くのを三條の通りで見かけました。その後の姿を見て兵馬は合點の行かぬ思をしながら壬生の屯所へ歸つて來たのでありました。

『あれは組のうちで慥かに見た男』

夜歩きをして壬生へ歸つた翌朝、隊長の近藤勇から使が來て、急に會ひたいといふから兵馬は、勇の前へ出ると、勇は刀架に秘藏の虎徹を載せて、敷皮の上に、腕を拱ぬき、端然と坐つて居たが兵馬を見る眼が、今日は、いつもより險しい、

『宇都木、もう夜歩きはならんぞ』

『は』

勇は、兵馬の不審がる面を、上から見据えて居るのです

『隊長、それは――』

『うむ、夜歩きをするな』

近藤の語氣には含む處がある、何とも理由は明かさず、頭からガンと夜歩きをさし止めて、まだ、何か餘憤があるやうです、併し言ひ譯をしても駄目である、近藤が言ひ出したら、これは是非の餘裕がないことを知つて居ますから兵馬は默つて控えて居る。

勇は、筋骨質の人です、頬の骨は磐石の如くに固く、額は剛鐵を張つたやうに強く、その間から光る眼玉に、どうかすると非常な優しみがあるが、少し機嫌の惡い時は、正面には見て居られない險しさ、殆んど獰惡の色が現はれて來ます。若し誰か勇に會つて、この

獰悪な眼の光を浴びせられたものがあるならば、その翌日の朝に
なると、その人は、必ず何處かの辻に、二つになつて斃れて居るの
が例であります。兵馬は、今勇が少しく其の機嫌を損じて居ること
を認めます、勇の怒りの怖るべきことをも知つて居ます。併乍ら
自分に疚しい事はない。――今は辯解しても駄目であるが、自ら事
情のわかる時がある、事情がわかれば勇の氣象はカラリと晴れる。
その事をよく呑み込んで居るので
『心得ました、いかにも夜歩きは差控へる』
『よし』
兵馬は、これで、自分の詰所の方へ歸つて來ます。
井戸側の處へ來ると、新撰隊士が二人ほど、水を汲んで面を洗つて
居ましたが

『井村、昨夜は晩かつたな』
『うむ、飛んだ寝坊をしちまつた』
『何處へ出かけた』
『悪い所へ行つた』
二人の話し合ひを、兵馬が通りがけに、ふと耳に入れて氣がつくと
あの井村の容子――昨夜の駕籠を守つて行つた浪人者の内の一人に
よく似て居る。

こゝに一つの事件がある、それは新徴組の隊長芹澤鴨が、京都のあ
る富家の女房を奪ひ來つて己が妾同様にしてしまつた事です。芹澤
はじめ其の手に屬するものゝ横暴は今に始まつたのではないが今度
の遣方は強盗に類することであつた、さうして其の話が兵馬の耳に

まで入つたのは翌日の事で兵馬はふと前夜の夜歩きの時に見かけた浪人共――それと芹澤が奪ひ來つたといふ町家の女房との間に脈絡があるやうに思はれてならぬ。殊に其の浪人共のうちの一人は慥かに芹澤配下の井村に違いないと思はれるから、いよ〳〵以て奇怪に感じて其の翌日、隊の門を潛ると丁度出合頭のやうに物置の方から出て來た井村、

『井村君』

兵馬が呼び留めると

『や』

井村はギョッとしたやうでしたが苦笑ひをして

『宇都木君か』

『井村君、君にちよつと尋ねたい事がある』

『何だ』

『近頃、君の方の手で女を取調べた事があるか』

『知らん』

知らんといふけれども、井村の言ひぶりは知らを切るものゝやうに聞えます。

新徴組には芹澤派と近藤派とがある、兩派の暗闘は容易なものではない。宇津木兵馬はどちらかと云へば近藤派で、芹澤の人物を好いてはゐない、それに机龍之助を芹澤が隠してゐるといふことを聞いてゐるから、今は芹澤が的である。

兵馬は、これから、一層、芹澤の一擧一動に注目することに決心し今日も夕方、彼の井村と、も一人の新參浪士をつれて、芹澤が屋敷

を出かけたのを兵馬は、そつとあとをつけて行きます。
彼等は本國寺の寺中へ入つて行くから、兵馬は寺の門を潜らず、しばらく遠退いて、門の中を見張つて居ると、程なく井村と新參の浪士と、二人は面の相好を崩して、笑ひ話をしながら門を出て來ましたが、彼等は壬生へは引返さないで本願寺裏手の方を四邊憚らず高聲で笑ひ興じながら島原口まで來ました。
これからは田甫――五六丁を隔てゝ其の田甫の中に一廓、島原傾城町の歡樂の火は赤く燃えて居ります。
『やあ、あの火を見ると胸が躍るわ、併し我々共の樂みは罪が淺い隊長のは、却々罪が深いのう』
井村の、此の聲が一層大きく田甫の中で響き渡ると、
『アハ、ゝ、』

二人聲を合せた高笑ひであとは、また斷續してよく聞き取れない、
新參の浪人が、ふいと後を振り返り、
『誰か來るやうじや』
井村の耳に囁くと、歩みをとゞめて、
『うむ、足音がする』
島原から一貫町までは人家がない、人が來れば見通しがつく
『島原通ひであらう、一番嚇して見やうか』
人を嚇して見るには宜い處、朱雀野の眞只中、近來こゝでは追剝と辻切とが流行る、遊客は、非常な警戒をした上でなければ通らない處です。
兵馬は二人の立ち止まつた處へ押しかけて、
『一寸、物をお探ね申す、壬生の地藏へはどう參りませうな』

『ナニ、壬生の地藏へ』
『壬生の地藏寺から南部屋敷の方へは』
『南部屋敷を尋ねらるゝ、どうやら其の聲は聞いたやうじや』
これは井村の聲で二足三足、兵馬の方へ近寄つて來ます
『やあ、宇都木君ではないか』
『その聲は、井村氏か』
井村は、こんな處で兵馬に遭うことを眞に意外と思ひ、同時に不安が湧いて來るらしく、
『どうして今頃、こんな處を、貴殿にも似合はない』
『七條へ參つての歸りがけ、つい道に迷うて』
『ハ、、、成程、この道は貴公等の迷うべき道じや、こゝを眞つ先ぐに行くと、あの明るい里、あれ微に三味太鼓の音も聞ゆるは、あれが我々共の極樂世界、君のたづぬる壬生のお寺は、あれあの高い屋根の棟がそれよ』
田圃の中に、黑く高く湧き立つた地藏寺の大屋根を指す
『あれが地藏寺、成程、さういへばこゝが島原、それでわかつた』
『待て、待て、宇津木』
『何か用か』
『これから、直に壬生へ歸るか』
『歸る』
『それは不可、こゝまで來ては、もう逃がしつこ無し』
井村は、兵馬の袖を捉えて、非常に氣味の惡い言葉使ひで、
『つき合へ、一緒に來い』
『何處へ』

『恍けるなよ、我々が行く處へ來い』
『いや、拙者は、さうしては居られぬ』
『わからずを言うなよ、隊長の近藤君や、芹澤君はじめ、皆んな此の島の定連なのじや、貴樣、若い癖に、こゝまで來て素通りといふがあるか』
『拙者は左樣な粹人とは違う』
『いや、さうでない、貴公のやうなのが、女には騷がれる、都へ來て、島原の太夫を知らんといふは話にならんテ、なあ溝部』
『それに違いない』
『それ見ろ、一度、この中へ入つて濟度を受けて見ん事にや、世の中の人情といふものゝ極意がわからん』
壬生と島原とは呼び交はすばかりの間である、兵馬としても、こゝに島原の在ることを知らない筈はないが、井村は頻りに兵馬の袖を引張つて放しません。

其の言ふが儘に、行つて見たら如何だらう。さうして彼等の爲すが儘に任せて置いて、それから、何かを機會に調べて見たら、それも妙ではあるまいか。
兵馬は、ふと、こんな事を思ひ出して、強いて袖を振放さうとしない中に、もう遊廓の一町ほど手前まで來てしまひました、
『よし、行く處まで行つて見やう』
遂に大門の前まで來た、
『これ見ろ宇津木、こゝが大門で、それこゝに柳があるが、これが有名な出口の柳といふものじや、入口にあつても出口といふ、これいかに、島原七不思議の第一は、これじや、中は晝より明るいぞ、

一足入れば歌舞の天女、生身の菩薩が御來迎じやわい』
島原傾城町の夜は盛んなる眩惑を以て、兵馬の眼の前に展開される。

七

島原の誇りは「日本色里の總本家」といふ處にある、昔は實質に於て、今は名殘に於て。
今の島原は全く名殘に過ぎない、音に聞く都の島原を、名に床しき朱雀野のほとりに、訪ねて見ても大抵の人は茫然自失する。家並は古くて、粗末で、さうして道筋は狹くて、汚ない。前を近在の百姓が車を曳いて通り、後を丹波鐵道が、煤煙を浴びせて過ぐる、その間に、やつと滅び行く運命を死守して、半身不隨の身を支へて居

るといふ慘めな有樣であります。
安永から天明の頃江戸の俳諧師二鐘亭半山なるもの丶（今より凡そ百年前）書いた「見た京物語」には
「島原は廻り土塀にて甚だ淋し中の町と覺しき所一膳飯の看板あり」
とあつて、それよりやゝ下り、
「島原の廓、今は衰へて、曲輪の土塀など傾き倒れ、揚屋町の外は、家も巷も甚だ汚なし。太夫の顏色萬事祇園に劣れり」
とは、天保の馬琴が記したものにある。
ましてや、それよりまた小一世紀を隔つる大正の今の時、問題の土塀も壞れ果てゝ跡方もなく、小店には、日々に空家が殖えて、大店は日に〳〵腐つて行き腐つたまゝ立ち枯れて、人の住まなくなつた

樓の塗り格子や、褪め果た水色の暖簾に染出された大きな定紋が、垢づいてダラリと下つた風情を見ると「さがや御室」で馴染の「わたしや都の島原できさらぎといふ傾城でござんすわいな」の名文句から思ひ出の優婉な想像が全く破れる。涙ながらに「日本色里の總本家」といふ昔の誇を弔うて「中の町」「中堂寺」「太夫町」「揚屋町」「下の町」など一通り、其の隅々まで見て歩くのは、まだ優しい人で、中には侮蔑を露出にして

「ナンダ詰まらない」

其の名前倒れを嘲る心を持つて、兎に角、こゝで、第一の舊家と云はれる角屋の前に足をとゞめて見ても、御多分に洩れぬ、古くて汚ない構である。侮り切つて、いきなり玄關から、應接を頼むと、東京では成島柳北時代に現はれた柳橋の年増藝妓のやうなのが、出て來て「御紹介のないお客樣は」と、極めてしとやかに御辭退を申上げる。

これは、物に慣れない遊子に對する特殊の待遇ではなく、若血氣に逸る半可通が新式の自働車を驅り催して正面から乘りつけて行つても、「御紹介のないお客樣は」の一點張で、其の來る者の、自働車であらうと、金鎖であらうと、バナマの帽子であらうと、更に驚かないのですから、こゝに於て「島原未だ侮り易からず」と最初の獨斷を、やゝ悔ひはじめるものもあるし、頑迷いよ〳〵度すべからず、これだから「滅び行く島原」だと匕を投げる者もある。

幸ひに、許されて中に入ることの光榮を得たものにしてからが、先づ何となしに馬鹿々々しくなる。

荒削りの巨大な柱が煤けた下に、大寺院の庫裡で見るやうな大きな

土竈がある、三世紀以前の龍吐水がある、漬物の桶みたやうなのが幾つも轉がつて居る。何の事はない、二十代もつゞいた大庄屋の臺所へ來たやうなものです。

加之に、長押には槍、棒、薙刀のやうな古强者が、楯を並べ、玄關には三太夫のやうな刀架が殘壘を守つて、登樓を客を聘睨しやうといふものです。

恐る〳〵、座敷へ通つて見ると、京都式の天井は低く、光線のとり具合は極めて惡い、併し乍ら、其處にも此處にも底光りがある、低くて暗いのは、必ずしも、淺くて安つぽい意味でない、といふやうな感じも、幾分か出て來て、さうして徐に間毎の襖や天井などに就て說明を求めて見ると、前の柳北時代の柳橋の老妓のやうなのが（多分仲居の功勞を經たものであらう）別に誇るやうな色もなく、新來の田舍客の爲に、よく說明の勞を取る。

第一を、御簾の間と云ひ、第二が奥御簾の間、第三が扇の間で、疊數二十一疊、天井には四十四枚の扇の繪を散らし、六面の襖の四つは加茂の葵祭を描いた土佐繪。

第四「馬の間」の襖は應擧、第五「孔雀の間」は半峰、第六「八景の間」は島原八景、第七「櫻の間」は狩野常信の筆、第八「團の間」には几董の句がある、第九「青貝の間」は十七疊、第十「檜垣の間」は檜垣の襖、第十一「緞子の間」は緞子を張つめる、第十二「松の間」は、十六疊と二十四疊三方正面の布袋があつて、吊天井で柱がない、岸駒の大幅がある。

なほ委しく聞いて見ると、間毎々にも一々由緒と歷史とがあつて、やれ「青貝の間は」螺鈿でござるの、檜垣の間は、これ〳〵の故事

で候ふの、西郷さんのお遊びの部屋は、いつも此の松の間の話の洩れない處に定めてあつたの、西郷さんの相方は、小太夫と云つて、月照さんと一緒に遊びに來られて、その相方は花桐太夫であつたなど、和尚も仲々罪を造つたものだなと思はせる話までも聞くことが出來ませう。

日本の遊女町といふものを、社會史上の一つの現象と見て、この後到底復活の望みのない日本色里の總本家の名殘の爲に、この島原の如きも、物ずきな國粹(?)保存家が出て、右の角屋、或は輪違其他の一部の如きに相當の方法を講じて置かないと、やがて、社會史の一角に、多少の參考材料を失うかも知れない。それで、右の角屋の如きも、二百七十年以前、島原初まつて(即ち寛永十八年六條から今の地に移つた時)以來の建築であつて、其他にもこれに類するものがあるとして見れば、時代の家屋の建築上からも、一個の參考物であると或意味からこれを尊重する氣になつて、素見に來た道樂者が思はず知らず社會學者となり老古學者となつてしまひます。

島原が秀吉から許された天正十七年は、江戸の吉原が德川から許された元和三年より三十年の昔になる、大阪の新町も、其の創立を元和から寛永の頃とすれば、いづれにしても、島原より弟であり妹である勘定になります。

さうして、柳町から六條へ移り、「新屋敷」の名が「三筋町」となり、三轉して今の朱雀野へ移つて「島原」の名を得たのが、寛永十八年といふことで、

「去んぬる頃より一つに合せて、七條西朱雀、丹波街道の北に島原とて、肥前天草一揆のとりこもりし島原の城の如く、三方はふ

さがりて、一方に口ある故に、斯やうには名け侍り」（浮世物語）

都名所圖會には、

「又寛永十八年に今の朱雀野へ移さる、島原と號くる事は、其の昔肥前の島原に天草四郎といふもの一揆を起し動亂に及ぶ時、此里も、こゝにうつされ騷がしかりければ世の人、島原と異名つけしより、遂に此處の名とせり」

切支丹禁制の記念が、遊女町の名によつて殘された事を思ふと、因緣も亦奇妙な感じがします。

事のついでに、日本に於ける遊女といふものゝ沿革を老人に聞いて見ると、古いところは萬葉あたりまで溯る、其の後、肥後の白川都近くは江口神崎、東海道の驛々には、大磯、黄瀬川、池田などに名を謠はれた。遊女町として、やゝ體を成しかけたのは、播州の室津あたりであらうとの事です。

平家が亡んで、辛うじて生き殘つた官女達が、ゝを寄せる所に困つて見す〳〵人の遊びものになり、蟹も平氏を名乘つて、無念の形相をする海邊に、浮かれ〳〵て身を賣つた、長門の赤間ヶ關、播州の室津などは、其れである、殊に室津は都近い船つきであつたから、遊里の體裁をなすまでに繁昌したものと見えます。

官許遊廓の根源こそはこの島原。島原の歴史にもまた相當の盛衰榮枯があつて、三筋町七人衆の時代、即ち灰屋三郎兵衛に身受された二代目芳野の頃を、全盛の時とすれば、祇園の頭を持ち上げた時が、やう〳〵島原の押されて行く時であらう。

さうして、この續き物の時代、即ち維新前後にパッとまた一花咲かせた、大小七十餘藩の武士が、一度に京都へ集まつた時、さびれか

ゝつた日本遊廓の根元地が、またも昔の權威を盛り返して、他場所で遊んで不首尾をした時は歸參が叶はなかつたけれど、島原での咎は歸參が叶つたといふ勢でありました。

八

島原の木津屋といふ暖簾の處へ、或日の事、百姓體の男が旅すがたで、

『少々、お賴み申します』

これは裏宿七兵衛、

『お客さんか』

眉を落して、小緞子の帶を前結びにした、三十前後の女が暖簾を別けて姿を見せ、

『どちらから』

『これは、ちと遠方から參りましたもので、御雪太夫さまのお館は此方でござりませうか』

『はい、御雪さまは此方でありますが、あなた樣は何誰』

『左樣でござりましたか、私は關東の者でございますが、太夫樣に一寸お眼にかゝりたくて上りました』

『お前樣が、あの太夫樣に、それは太夫樣御存知の事か』

『いや、お眼にかゝつて、申上げたいことで、案内も存じませぬ故宿へつきまするとすぐ早速これへ參りましたやうな譯で』

『阿呆らしい』

女は、輕侮の色を現はして、

『太夫様が、知己のない方にさう容易く、お目にかゝるものかいな出直してお出でなされ』

引込んでしまはうとするのを、七兵衛は、

『あ、もし、太夫様に、お眼にかゝれぬならば、あの、お松と申す女の子が、このお家に御厄介になつて居りまするとやら』

『お松――』

『はい、この頃關東から上りました女の子』

『おゝ、そんな事も』

女は容子ありげな七兵衛の風情を見比べて、何と思つたか、急に打ち消して、

『そんな、お方も存じませぬわいな』

『それは困つた』

七兵衛は、やゝ當惑の色、女はそれを見て、いくらか氣の毒の念を催したものと見え、

『お前さん、太夫様に會ひたいとならば會ふやうにしてお會ひなされ、只今は揚屋入で、お留守じや、あとで傳へて置きませう』

『はい、それでは後刻また伺ひまする……それからあの、只今、太夫様に會ふには會ふやうにして會へと仰有いましたが、それは、どう致したら宜しうございませう』

『それは、こんな處でなく、あちらに宏大な揚屋といふものや、お茶屋さんといふものがありますから、そこで聞いて御覽』

『關東から上つたばかりでございますから、トンと何もかも存じませぬ、失禮を致しました、それでは、も一應あちらで聞き直しました上で、また後刻お伺ひ致しまする』

斯う云つて、七兵衛は叮嚀に御辭儀をして木津屋の前を一旦立ち去らふとすると、道筋を、こちらへ、揚屋から歸る太夫の一行があります。

太夫も道中も島原がはじめ、道中とは太夫が館と揚屋との間を歩く間のこと。

ずつと昔は毎月廿一日に、後には年に兩度、その後は年に一度四月の廿一日、眞行草の三つの品の中、眞の道中は新艘の出る時さうしてこれは、最も普通の意味に於ける道中太夫が館と揚屋との間を歩くだけの事。

霞にさした十二本の簪、松に雪輪の刺繍の帶を前に結び下げて、花吹雪の模樣ある打掛、黑く塗つたる高下駄に緋天鵝絨の鼻緒すげたるを穿いて、目のさめるばかりの太夫が、引舟を一人、禿を一人だんだら染の六尺帶を脊に結んだ下男に、長柄の傘を後から、差しかけさせて、悠々として練つて來ましたから七兵衛は、こちらの、遊女屋の軒下に立つてその道中の有樣を物珍らしと見て居ますと右の一行が、木津屋の暖簾の中へ、入つてしまひ、そのあとから、男が二人、黑塗りの長持のやうな大きな箱を擔ぎ込む處まで見て居りましたが、その箱の一方に、將棋の駒の形をした木札があつて、それに「御雪」と記されたのを見る、

『もし〳〵それへお出でのお客さん』

梅の花の振袖を着た小さな禿、ちよこ〳〵と走り出て呼び止ますから、七兵衛は振返りました、

『私でございますか』

『はい、あの太夫さんが、お前に合ひたいと申しまする、お入りな

さい』

『それは有難う存じまする』

七兵衛が通された部屋には、古色を帶びた銀襖があつて、それには色紙が張り交ぜてある、昔から此地の名ある太夫の寄せ書を集めたものであらう、七兵衛は、その和歌の二つ三つを讀んで見ましたが自分には讀み拔けないのが大分あります。七兵衛は敎育を受けられなかつた人間で、自分一箇の器用で、手紙の文字や、觸れ書の解釋位は、人並以上にやつてのけるが悲しい事には、こんな優びやかな文字を見ると、男でありながらと、私かに額の汗を拭いて感心したり慚ぢ入つたり。

九

木津屋の一と間で、七兵衛は手枕で横になり、朋輩桑と嵐山の方へ行つたといふ、お松の歸りを待つて居ます。

今會つて、一通りの話をした、御雪太夫の面影を思ひ返して、道中で見た時とは違ひ物々しい飾りを取り外し、廣くて赤い襟のかゝつた打かけに、華美やかな襦袢や、黑い胴ぬきや、紋縮緬か何かの二つ折の帶を卷いて前かけのやうな赤帶を締めて濃い化粧のまゝで、紅をさした唇、鐵漿をつけた齒並の間から、洩るゝ京言葉の優しさ年の頃は、お松より二つも上か知らん、お松とは姉妹のやうに思うてゐると云ふたが、姉にすれば、申分のない姉、あんな姉があらば

お松は仕合せである、お松の爲にはこのまゝにして、あの太夫さんに任せて置く方が、結句幸福か知らん、七兵衛は、お松の身受けに來たのだけれど、來て見ればお松の將來に就て又變つた考へが出て來ます。

七兵衛は、それからお松の身受の金の事、關東へ伴れて返つて如何しやうかといふ事などを色々と考へてゐるうちに眠くなつて、うとうとと夢に入らうとすると

『御免遊ばせ――あ、おちさん』

眠りに落ちやうとした七兵衛は、物音に眼を開いて、其處へ入つて來た美しい女の姿を見る、

『青梅のおちさんではないか』

女は斯う云つて跪いたので、七兵衛は身を起して、

『お松坊か――お松坊であつたか』

『はい』

お松の姿は、三度變つて居る、第一は大菩薩峠の頂で猿と闘ふた時の笈摺の姿、第二は神尾の邸に侍女をして居た時の御守殿風、第三は即ち今、太夫ほどに派手でなく、藝子ほどに地味でもない、華奢を好む京大阪の商家には丁度、この位の振合をした嬢樣がある。

七兵衛はお松の侍女時代を知らなかつたから、その變つた事に目を驚かす

『久しいことでございました』

お松はハラ〳〵と涙

『ても、大きうなつたなあ、美しいものになつたなあ』

七兵衛の眼も何となしに潤はうて來ます、

『もう、この世ではお眼にかゝれないかと思ひました』
『馬鹿な事を言ふな……何の百里や二百里の道』
七兵衛も悲しくなる、お松も悲しくなる。
七兵衛の足では、百里や二百里の道は、何でもないが、お松の身がこの百里を隔てた西の都に來るまでには、容易ならぬ行路の惱みがある。
お松は、しばらく袂を面に押し當たまゝ、しやくり上げて居ましたが、
『何時、こちらへ、お着きになりまして』
『今日來たよ』
『よう、此處が知れましたなあ』
『うむ、ちよつとした引かゝりで、聞き込んだから、直に飛んで來た、來て見れば、お前の身の上も、思つたより無事で、斯うすんなり會へやうとは思はなかつた、さうして、わしは、お前をつれて江戸へ歸るつもりで來るには來たが……今も、こゝで、落々考へて見れば江戸へ歸つたとて、お前の賴る所も無いやうではあるし、わしも思ふやうに世話をして上げるわけには行かない、緣あつて、此方に來たものだから、一層、こちらで暮らすも宜いかも知れぬ、如何だ、お前の考へは、遠慮なく云つて御覽』
『有難う存じます、おぢさん、何處へ行きましても、運の惡いものは惡いものでございますね、わたしは、もう諦めました』
『どう諦めた』
『江戸へ歸りたいとも思はず、こゝで一生を送りたいとも思ひませぬ……運には勝てませぬから、何事にも逆はず身を任せて行くつも

りでございます』
七兵衛は腕を組んで暫く考へ
『それでは……お前は傾城になるつもりかね』
『この月中に、あの御雪様の妹分として、つとめをするやうに、定まつてあるのでございますから……わたしも其の氣になつてしまひました』
七兵衛は、考へ込んだ上で、
『さう腹が定まれば、それでいゝやうなものだが、わしに云はせると、それでは濟まぬ、わしはお前を遊女傾城にしたくはないといふものだ』
『けれども、おちさん……』
『わしは、お前を救ひ出しに來た筈なのだ、何としても一旦は、お

前の身受けをせにやならぬ、それから先は、お前の心任せ、江戸へ歸らうと、こちらに留まらうと、文句は言はないつもりだが』
『身受けと申しましても、おちさん……』
『お金の事なら心配しなくてもいゝ、それは幾ら掛らうとも承知の上だからね』
『有難うございます』
お松は、また涙を拭く、身受けをされて自由になることが、お松にとつて嬉しくない事はない、若し、歸るべき家があり、手をとつて泣き會ふべき親兄弟がある身ならば一層の事、七兵衛にしても、この娘をつれて歸つて、引き合せてやる緣者があるとか、思ひ合ふ男に添はせてやるとかいふ的があるならば、張合があるべき處だけれども、これを伯母のお瀧に返してやらうか、または妻戀坂のお師匠

樣に預けやうか――危ない〳〵、此處に置くよりも危ない、そんなら、自分が引取つて世話をしてやらうか、いつ首が飛ぶか知れない身、尙ほ危ない〳〵。

『おぢさん、わたしは、もし身受けをして戴くやうになりますればあの澤井といふ山の中へ引込んで暮します』

『何だ、澤井へ、澤井の何といふ處へ』

『あの萬年橋といふ橋の下に、水車の小屋がありますさうな、其處で、お米を舂いたり、粉を振つたりして稼ぐつもりでございます』

『萬年橋の水車で、あそこに知り人でもあるのかな』

『あい、約束した人が……約束と申しますと、異な事に聞えませうけれど、わたしを親身にして呉れた人が待つて居る筈でございます』

此の女を待つてゐるといふのは何者、約束した人とは誰。

果して、そんな人があるならば頼もしい。

十

京に多き物、寺、女、雪駄直し、少き物、侍、酒屋、けんどん屋、願人云々、それがこの頃は何處へ行つても、肩ひじ怒らした侍ばかり、多いものゝ二番目に數へられた女の影が却て道の通りには甚だ少ない。

島原の廓、一貫町を出てから七兵衛は胸算用をはじめました。

お松を身受けするのに、費用が四百兩の頭を出る、百兩を手金に置いて、あとの三百五十兩、それを、これから工面にかゝる、猶豫を三日間取つて置いた。

千本通で暮れ六つが鳴る。
道すがら、町と人家の形勢を見てそのつもりも無く壬生の地藏の前まで來ました、地藏へ心ばかりの賽錢を投げ引返して表へ出ると例の南部屋敷の前。
『誰の邸だらう、大名にすれば慥かに十萬石以上』
壬生の村は、もう暗くなる、機を織る梭の音が、この亂世に太平の響きをさせる、知らず〳〵綾小路を廻つて見れば、田圃の中には、島原の火が靄を赤く燒いて居る、お松は、あの中で何を思つて居るだらうと、七兵衛もそゞろ物の哀れを感ずるのであります。
七兵衛は、今壬生の南部屋敷から程遠からぬ處の、とある一せん飯屋で飲んでゐる。

『親方、いゝ酒だな』
『へえ〳〵』
『この鰻は、何處でとれるのかね』
『それは若狹鰻でございます』
『これも、中々旨いね』
『へえ、成るたけ、宜い物を賣らんと、御近所が喧しうございます』
『成程、御近所には大分宏大なお邸があるやうだ、お出入がきついから、品も胡麻かしが利かないのだね』
『まあ左樣なわけでございまする』
酒も宜いし、鰻も宜いから七兵衛も陶々とよい氣持になつて主人と話し込んで行く、
『お客樣は何でございますかい、お地藏樣へ御參詣で』

『左様、今お地藏様へ參詣して歸りがけさ』
『今年は、どうですか、お地藏様も、この分では、狂言がお流れになりさうで』
『狂言とは何だね』
『ナニ其の、壬生狂言と申しましてな、近いうち面揃えがございまする、當年は、この通り亂世でございますから、如何なる事でございますか』
『成程壬生狂言とやら、國でも、名前だけは聞いて居ましたが』
『仲々、風が變つて、面白いものでございますよ、お客様、永逗留でございましたら、ぜひ見て行かしませ』
『それは、話の種に見物がして置きたいものだね』
『それからな、あの島原といふ傾城町に一年一度の太夫道中があり

ますで、これがまた、大した見物でございます』
『成程、成程、花魁の道中は、わしも一度江戸の吉原で見ましたつけ、此方のは、また變つた趣向でもありますかな』
『ナニ同じやうなもので、わし共は江戸のは錦繪で見ましたが、あちらの方が、何を申しても規模は大きいことでございませう、道中の本家は矢張り、この島原ださうで、見物も夥しいことでございますわい』
『成程な』
七兵衛はこゝで時間を少し餘計に費したいのだから、わざと氣長く構へて、親方と話しをして居る處へ、
『御免よ』
小間物の荷を背負つた町人風の男が入つて來ました、

『爺さん、今晩は』
荷物を手近へ卸して、腰をかけた小間物屋は腰から煙草入を取り出しながら横目で七兵衛をチロリ。
七兵衛も、この小間物屋をひよいと見る、お互に目つきが變だと思ひます。
『これは福造どの、今日は遲いことじやな』
飯屋の親方は、心安さうな口の利き方。
『今日は、南部のお屋敷で、品物を取擴げ、それが爲暇を取りましたわい』
『はてな、南部のお屋敷へ、小間物屋とは、ちとお門が違いさうじやがな』
『そのお門違の處で、思ひがけない賣上を見たものさ、だから商賣

は水物だよ』
『成程、あのお屋敷へ小間物が賣れやうとは、誰も思ひがけない、浪人衆が小間物とは、坊さんに簪のやうなものかね』
『仲々、あれでお前、表は嚴めしさうなれど、裏からは、祇園、島原あたりから市兵衛駕籠が乘り込むといふものさ』
『さうですかな』
親方は感心したやうな顔をしながら銚子を持つて來る、
『爺さん矢張り、鰻がいゝね』
小間物屋は、グビリ〳〵とはじめて、親方との話が途切れると、面を七兵衛の方へ持つて來て、
『少し曇つて來たやうですね』
『さうですか、晴れて居ましたがね』

七兵衛と、小間物屋と話のきつかけが出來る
『降るやうな事も無からうが、一體京は、江戸よりも天氣が變りぽいやうですな』
『さうですかな、わしは京は、初めてゞございまして』
『失禮ながら關東はどちらで』
冐頭に關東と言ひ出されたので、七兵衛は小間物屋の面を見ながら
『武州でございます』
『さうでゞざんせう、お言葉といひ、御容子といひ、武州も、お江戸近く、次第によつたら、甲州筋……どうでゞざんすな』
七兵衛は再び、この男の面を見直します。どうも眼つきが小間物屋にしては強過ぎる、關東の者か、上方の者か、その位の區別は誰にもつくが、江戸近く、甲州筋、そこまではちと念がいる。

『よく當りました、八王子でゞざります、して、わしの生國まで、見貫きなさる、お前さんは――』
『わしかね、わしも實は關東さ、常州水戸……ではない土浦生れが流れ〳〵て、花の都で、女子供を相手にこんな商賣をしてゐますよ、失禮、一献』
猪口をさし出した手を見ると、竹刀だこ、七兵衛何氣なく、それを受けて、
『これは〳〵』
小間物屋は七兵衛と一献を取り替はして、出て行つてしまつたあとで、七兵衛は漸く飯を食ひはじめながら、
『親方、其の南部屋敷ていのは一體何だね』

『南部屋敷といふのは、その壬生のお地藏樣の前にある大きなお邸
今浪人衆が集まつてお居でなさるあれでございます』
『お地藏樣の前』
『黑い御門があるでございます』
『成程』
七兵衛が、目星をつけて置いたのはその邸
『で、その浪人衆といふのは』
『近頃、關東からお上りになりました新選組、と申しまして、つまり、この頃諸國から上つて參る浪人をつかまへる浪人衆でございます』
『浪人を、つかまへる浪人？』
『でございますから、肩ひぢの、こんなに張つた、腕つ節の、こんなに太い、豪傑揃ひでございます、わし共も、その浪人衆の御贔負を受けて居るのでございますよ』
『で其の頭は何といふ方ですかね』
『お頭は芹澤樣に、近藤樣』
『芹澤樣に近藤樣、お大名ですかね』
『なに、お大名でも旗本でもありません、どちらも浪人衆で』
『お名前は、何と仰やる』
『芹澤樣の方が鴨』
『鴨ですつて、妙なお名前ですね』
『全く妙なお名前ですよ』
『それでは、近藤樣の方はあひるとでも申しますかね』
『冗談云つちやいけません、そんな事が、浪人衆の耳に入ると、斬

られちまひますせ、近藤様の方は、大分威勢のいゝお名前だ、イサミ、勇と仰有います』

『成程、イサミ、待て、待て、近藤勇――お名前を聞いて居る、それで何かい、親方、其の芹澤様と近藤様と、お二人が頭で、浪人衆が、どの位お居でなさるかね』

『さうさね、どの位と云つて、わし等には確とわかりませんが、一寸見た處で、七八十人、それに、あちらこちらに、出張所といふものもあるやうでござんすから、皆んなでは中々の人數でございませう』

『お扶持は何處から出るんだね』

『會津様から出るのでございます、その外にも大分收入がおありなさるやうで、茶屋や揚屋で、あのお仲間が、お使ひなさるものも少くはないとやら、景氣が素敵によいのでございますがね』

『うむ――さうかね』

話は、こゝで途切れて何處かの寺院の鐘が鳴る。

『はてな』

『四ッでございます』

七兵衛は飯を食ひ終つて、代を拂ひ、この店を出て壬生村の闇に消える。

七兵衛は、地上を縦に走ると共に、横に走ることも出來たといふ。横に走るとは塀なり垣根なりを足場として、地上とは身を平行にして或距離を疾走する、また、逆に天地返しの歩き方といふのをやる。天地返しとは、天井へ足をつけて、頭を地上にぶら下げて歩く、壁

を直角にかけ上る氣合で、天井を一歩きして來るものであらう。
七兵衛は子供の頃から、屋の棟を歩くのが好きであつた、自分の家の屋の棟を歩き終ると、隣りの屋根へ飛び移つて、それからそれと宿の土を踏まずに歩いて居た、長い竿で追かけられる、その竿をくゞり抜けて、木の枝に飛びつき、塀の峰を走る、八方から竿で、つきかけて、遂に足を拂ひ得たものも無かつたさうです。
月の宵、星の夜、眞闇な闇の晩、瓢々として七兵衛が、この屋の棟遊びをやらかす事がある、秩父颪の烈しい晩など、サーッと、軒を拂つて散る淅瀝の聲が止むと、乾き切つた杉の皮がサラ〳〵と鳴る
ト、ト、トと、なづなを刻むやうな音を屋根裏で聞くと、老人は眉をひそめて、
「七公、また悪戯をはじめやかつたな」

七兵衛は、地上の物をとることが上手なやうに、水の中の物をも能く探ることが出來た。
七兵衛が、多摩川の岸の岩の上に立つて、水の中を見ながら、それ其處には鮎が居る、山魚が居る、かじかが居る、はやが居る、おこせが居る、ぎんぎよが居る、それ其方へ行つた、それ此方へ來たと獨り言を云つて居る、誰が見てもそんなものは一つも見えないのに熟練な漁師が見てさへも見えないのに、岩の上から下りて來て、手を或る石の下へ入れると、其の云つた通りの方角で、云つた通りの魚を手掴みにして來る。
永年の漁師が、いろ〳〵の道具を用ひ、不漁で困つて居る時でも、七兵衛が行けば、きつと、びくを一ぱいにして歸る、七兵衛が魚をとるのではない、魚の方から七兵衛に來るのだと、舌を捲いて居た

ものです。七兵衛自身について其の秘訣を聞けば事もなげに笑つて

『皆んなの人は、魚を逃げるやうに追つかけ廻してるだから、捉まらねえや、俺は、斯うやつて見てえて、魚が向うから來る鼻つぱしを掴むから逃がしつこなし』

一夜に四十里五十里を普通に歩いて槍鐵砲（槍張りの笠）を胸に當て、歩いても其れが下へは落ちなかつたといふことは土地の人が誰も云ふ。

青梅の町の坂下といふ處に、近い頃まで「七兵衛地藏」といふのがあつた、それは、七兵衛が盗んで來た金を、夜な〳〵其處へ埋て置いた。七兵衛が斬られて後、金は掘出された。其のあとへ、石のお地藏樣を立て、「七兵衛地藏」と名づけられる。

この地藏は、最初は、足腰の病によく信心が利くと傳へられた、それから勝負事をするものにも信仰された。

夜、人知れず、この地藏樣のお膝元を掘つて、相當の金を埋めて置く、其の金が三日經つて、元の儘であつた時は、其の月の中に、願ひ通りの大金が儲かる。なんぞと云ひ觸らす者があつた。けれども埋めた人で三日經つて、元の金を見た者が無い。それは附近の博徒が其んな流言をして置いて埋めた金を、そつと掘り出してしまふのだと譯つて、金を埋めるものは無くなつた。近頃は町並を改正した爲に「七兵衛地藏」も他へ移されたといふことです。

七兵衛の屋敷跡も、今現に「七兵衛屋敷」と唱へて青梅の裏宿に桑畑になつて殘つて居るが此の「七兵衛屋敷」には、樣々の祟りがあると言觸らされて居る。最初に、それを買つた人は、手入れをする早々、眩暈がするとて、引込んで其の晩に頓死した。二度目に、安

くそれを引き受けた人は、ブラ〳〵病にかゝつて、三月目程で死んでしまつた。三度目には、怖れて近づく人もなく抛つてあつたのを剛情な男があつて、ナニを、それは時のめぐり合せだ、物の祟りなんぞは、箱根から東には無え、なんぞと言つて無錢同樣で引き受けて、桑を植た。幸に、その男には別に祟りも見えなかつた、世間も安心し、當人も自慢で居ると、或る年の冬、其の畑に手入れをして居ると、桑の枯枝を結へてあつた藁がプツリと切れて、其の枝が眼を撥ねた、家へ歸つて來る間に、其の眼がつぶれてしまつた。それから後、七兵衛屋敷は如何なつたか知らない。

壬生の村のその晩は殊に靜かな晩でした、南部屋敷もさすがに人は寢靜まる、勘定方平間重助は、井上源三郎と碁を打つて居るばかり井上の方が少し強くて、平間は二目まで追落される、二人が碁をはじめると夜明しをするのが定例。

お互に天狗を言ひながら局面を睨んで居ると、夜中にフイと行燈の火が消えた、

『や、油が盡きたかな、火取虫奴のいたづらか』

漸く附木の火はついた、室には何の變つた事もなく、盤面の石も其のままに、行燈は油が盡きたのでも火取虫が來たのでもないやうであつたが、碁に夢中な二人は燈火の消えた原因などを調べてゐる餘裕は無く、再び燈火が附くと其のまゝ碁を打ちつゞける、夜明け方になつて、此の碁が濟むと井上は歸り平間は寢る。

南部屋敷を、七兵衛が覘つた晩は、この室で行燈の火が消えた外には何等の異狀もなくて濟んだが其の翌朝、平間重助は、昨夜碁を打

つた室に、物すごい顔をして坐つて居る。

『平間氏』

障子を開いて、身を現はしたのは、追分の松の下で棒を持つた仲裁の人、一せん飯屋で七兵衛を不審がらせた小間物屋、まことは山崎譲。

『おゝ山崎君』

山崎は前夜の通り、無腰のまゝ地味な藍縞の商人體で平間の前へ無造作に坐り、

『顔の色が悪いやうだ』

『うむ、さうか』

『昨夜も、碁で夜明しをやつたな』

『うむ』

平間の意氣は沈んで居る、山崎が輕く話しかけるほど口が重くなる

『どうした、可笑しいぞ、今日は』

『山崎君、大變が出來した』

『何ぢや、大變とは』

平間は首を垂れた後、屹と山崎の面を見て、

『山崎君、拙者の頼みを聞いてくれ』

『何だ、改まつて』

『一生の頼みじや』

『一生の頼み、眞顔で云うだけに氣味が悪い』

平間は非常に苦しさうな息をついて

『俺は腹を切る、友達甲斐に介錯を頼むぞ』

『ナニ、腹を切る』

『うむ、腹を切る』
『よし、切るだけの事があらば切れ、介錯もしてやらう、だが其の仔細がわからぬ、それを聞いた上で』
『先づ、一通り聞いて呉れ』
『聞くとも』
『昨夜、井上と碁を打つた』
『うむ』
『夜明けまで打つて、それから今の先きまで寝た』
『うむ』
『起きて見ると、金がない』
『金が――盗まれたか』
『碁を打つ前に数へて納めた小箪笥の中三百兩の不足じや』

『怪しからん、詮議をしたか』
『さあ、その詮議が六つかしい、あれから此の室に居たは拙者と井上、これを騒ぎ出せば井上が承知すまい』
『うむ、元より井上は盗みをするやうな男でない』
『で、外ならぬ新撰組へ盗賊が入つたとあつては、一統の恥』
『さう云へば、さうじや』
『そこで、拙者一人で罪を被る』
『うむ』
『島原通ひの金に困つて、預かりの金を費ひ果した、其の申譯に腹を切る、隊中へはその様に披露する』
『成程――』
山崎は深く考へ込んでしまつた。

『待て、俺に少し考へがある』

この時に、山崎の頭にポーッと現はれたのは、昨夜、一ぜん飯屋で飲み合つた關東の者といふ不思議な旅人、向うでも變だと思つたらしいが、此方でも解せないと思つて別れた——平間と山崎とは友人で、山崎は、常に樣々に變裝をして、諸國浪士の動靜をさぐるに妙を得て居ます。

十一

その翌朝になつて、七兵衛は一寸した羽織を引かけて草履穿きで、小風呂敷を腋にかゝへて、鳥原へやつて來ました。

大門を入つて、道筋を左に曲らうとすると、ふいと向うからやつて來て、お互に面を見合せたのは、昨夜一ぜん飯で杯を取交した小間物屋です。

『氣味の惡い奴が來たな』

七兵衛は、何となく氣が置けて、面を外らして通り過ぎ、木津屋の前に立つて見ると、つい先の路次に彼の小間物屋は、さあらぬ體でこちらを窺つて居ます。

よつて、七兵衛は、わざと、其處を通り過ごして、揚屋町の方へ曲らうとすると、件の小間物屋がソロ〳〵と、引返して、どうやら自分のあとをついて來る容子です。

七兵衛は、揚屋町をグルリと廻つて、また道筋へ出る。

と、見れば右の小間物屋は、やつぱり後をついて來る。已むを得ず七兵衛は、用もありもしない下の町へ出て、ぶらり〳〵と、軒並の

掛行燈などを見て行く、一廻りして中堂寺町へ出て、後を見ると小間物屋の姿は見えない。

占めた、七兵衛は喜んで、三たび道筋へ出ると煙草屋がある、煙草を買つて行かうと、其の店へ面を突込んで見ると、其處の店先に腰をかけてプカリ〳〵煙草をふかして居るのが右の小間物屋です。

七兵衛も、いよ〳〵氣味が惡くなつた、知らん面で、煙草を買つて詰め替へて、店を出ると、右の小間物屋も、ソロ〳〵とあとをつけます。

これは可けない、出直さう。

七兵衛は、また大門へ引返して、丹波口から東をさして出ると、小間物屋もやつて來る。

七兵衛は尻を端折つた。

さうして、すつと、歩き出した、今まで廓の中をブラリ〳〵と歩いて居たのとは足並が違ふ。

小間物屋は、急ぎ足で追ひかけた。

七條通りまでは追ひかけたが、そこでふつゝり見失つた、小間物屋は歯噛みをした。

引返した小間物屋は、また島原の廓の中へ身を現はします。

逃がしたのは殘念だが、見當のついたのは喜ばしい。

山崎讓は、何か獨り合點をしながら木津屋の暖簾の前へ來て見る。

こゝの御雪太夫と、近藤勇との仲は山崎もよく知つて居る、何か思ひついて、

『今日は、御免下さいまし』

『あい』

嬉しさうに駈出して來て、小間物屋の姿を見て、急に氣落ちがしたやうに、

『何御用』

といつたのはお松です。

『小間物屋でございます』

『小間物屋さん、少しお待ちなさい』

と云つて引込んだお松の後を山崎は見送つて居る。

お松は七兵衛の來るのを待ちに待つて居るけれども、七兵衛は影を見せない。

出口の柳まで、目に幾度も出て見た、家の前でする足音は、皆、七兵衛ではないかと思つて、駈出して見たけれども、あれも、これもその人ではなかつた。

今夜寢て起きれば、明日は三日目、明日こそお松は、此處をつれられて歸る約束の日、色々と想像して其の夜は眠れずに待つてゐる。

もう、丑の刻あんまり行末越方の事が思はれて七兵衛待遠しさに眠れないので、お松は、かねて朋輩衆から聞いた引き帶の禁厭の事を思ひ出した。それは、夜丑の刻、屋根の上の火の見へ上つて、待つ人の家の方に向ひ、平縫の帶を投げかけて自分は其の端を持つて、振向かずに火の見を下りて來る、その帶が物へ引かゝらず無事に自分の部屋まで來ることが出來ればその待ち人は、キツト來るに違ひないといふことです。

お松は、それをやつて見やうと心を決めて、そつと帶を出して、この部屋を忍んで、二階から火の見へ出て見ました。

空は星が高く、葛野郡へ銀河が流れる、一二軒、長夜の宴を張つた揚屋の灯も見えるが、其の他は靜かな朱雀野の夜の色。

火の見に立つて、お松はその帶を投げかける何れをか見廻したけれども、七兵衛の宿といふのを聞いて置かなかつたから、やはり出るにも入るにも大門の方。

別れても亦會うといふ意味の引き帶を、お松は朋輩から聞き覺えたやうに、大門の方に向つて投げかけて、

東路の道の果なる常陸帶

かごとばかりも會はむとぞ思ふ

この歌を口の中で唱へて、立つて居ると、サーッと、風の吹きつけたやうな物の音、中庭の立木が死に擦れて鳴るかと思へば、猿のやうに屋根へ飛び上つた人影。

お松はハッと身が竦む、その時黑い人影は早や自分の前に立つて

『聲を立てるな』

『許して下さい』

『おゝ、お前は——』

『お松ではないか、お松坊』

『やあ、お前はおぢさん』

待ち焦るゝ人は此處に來た、けれども、あんまり突飛です。夜の丑の刻に屋根傳へに、こゝへ來るとはお松の眼には、これも夢以上

『よい所で合つた、お松、お前に合はうと思つて忍んで來たのだ』

『おぢさん、今頃、どうして此んな處へ』

『事情を話せば長くなる、何にしろ、わしが身は急に忙しくなつた』

『忙しいとは』

『わしは人に追つ蒐られる、怖い人が、わしをつけ覘つて居る、それでお前の處へも來られなかつた、お前をつれて歸ることも出來ない、しばらく此の儘辛抱して呉れ』

『おちさん、それでは、わたしを置いて何處ぞへ』

『さうだ、これから直に旅に出にやならねえ、お前をつれると、お前の爲に惡いから、當分此のまゝで辛抱して呉れ』

『まあ、どうしたものでせう、おちさん何か惡い事をなすつたの』

『いや、あとでわかる、斯うして居る間も危ないのだ、そんなら、お松、隨分身體を大事にしてな』

『わたしは、如何したらよいでせう』

『ナニ心配するな、親方にも、太夫さんにも宜しく……だが、わしが來たとは決して誰にも言うではないぞお役人のやうなのが來ても默つて居なさい、あの身受の金は、持つて居るが今は出せない……』

通りで夜番の音がする、

『お松、よいか、ナニ近い中きつと來る』

斯う云つて、七兵衛は屋根と屋根とを蝗のやうに飛び越えて行つてしまひました。

十二

はじめて、廓の大門を潜つて見た兵馬の眼には、見る者、聞く物、皆異樣の感じです。井村、溝部等は、揚々と行くに引きかへて兵馬は、一足進む毎に息がつまりさうに思ふ、遂には堪らへなくなつて引返さうとしたが、我慢して、其のあとをついて行くと角屋へ入る。

『壬生じや、壬生から來た』

『よう、お越しやす』

仲居は、直に迎へに出たが、横を向いて好い顏をしなかつた。

井村、溝部は刀を提げたまゝ、横柄に座敷へ通る、揚屋へは刀禁制であるが、壬生といへば刀のまゝ上る、井村は、大胡坐をかいて、酒を命じ、藝子と太夫を呼びにやる。

命を奉じて仲居は出て行つたけれども、暫く姿を見せず、實は蔭でおぞけを振ひ、成るべくこの連中の席へは遠のいて居るわけです。

井村と、溝部とは盛んに呑む、兵馬は少し離れて、二人の容子を見ながら坐つて居ると、他の座敷で頻りに三味や歌の聲、時々、調子外れの詩吟が交る。

この時、井村はわざとらしく眉をひそめて、

『喧しい國侍共、殺風景な歌ばかり歌ひ居るわ……抑も、島原の投節、新町のまがき節、江戸の繼節、これを三都の三名物といふ、今時は投節を面白く歌うて聞かせる藝子も無ければ、それを聞いて欣ぶ客もない、あんなガサツな流行謠や、突拍子もない詩吟で、廓の風情も臺なし、いよ〳〵世は末じやて』

井村は柄にもない慷慨をして、ハハと笑ひ、

『さあ、これから拙者が、投節くずしといふのを歌うて聞かせる——まあ、宇津木、さう固くならずに一杯飲め』

盃を、兵馬の前につきつけた時、兵馬は、その盃を受けて井村の方に向き直り、

『井村、實は君に聞きたい事がある』

『何だ改まつて』

『貴殿の手に傷がある、その傷は何處で受けた、それが聞きたい』
『ナニ、この傷！』
盃を出す、手先をずつと見られてしまつたから、もう隠しても遅い、
『これは、一寸した怪我、稽古槍を受け損じた』
『欺りを云ふな』
兵馬は、一膝つめよせる、
『欺るとは何だ』
井村は眼に角立てゝ、刀をそろ〳〵引き寄せる、
『稽古槍の怪我ではあるまい、眞劍の創であらう！』
『何！眞劍の創』
『さうだ、井村、貴様は、四條通りの菱屋といふ商人を知つて居る

筈じや』
『菱屋、それが如何した』
井村が刀をつかんで氣景ばむので、溝部もそれに加勢をするつもりで刀を取り上げて眼の色を變へる。
兵馬も、刀をとつて床柱の方へ少しさがつて、
『その菱屋へ、日外三人の盗賊が入つた事がある、それについて君に聞たいのだ、さう氣色ばむな、穏かに話さうではないか』
『そんな事は知らん、俺は菱屋とやらの番頭でもなければ、盗賊の目付でもないぞ』
『誰も、君が菱屋の番頭だとも、盗賊の目付だとも云ひはせん、但其の盗賊の身許を、君に尋ねて見たまでじや』
『盗賊の身許を俺に！』

『さうだ、君が知らんといふならば、其の創に聞いて見たい、稽古槍の怪我か、眞劍の創か、その創口に物を言はせて見れば、わかる筈である』

『怪しからんことを云ふ、餘の儀とは違ふぞ、盜賊呼ばはりは聞き捨てならんぞ』

井村は眞赤になつて刀の柄に手をかけると兵馬はそれを制し

『井村、拔く氣か、それは廢せ、君が拔けば拙者も拔く、溝部も拔き合せるであらう、どの道、どちらか怪我をする、こゝの家を騷がせ、客人を驚かすに過ぎない、無益な事じや、まあ、刀は下に置けさうして穩かに話さう』

『默れ〳〵、盜賊呼ばゝりをされては、俺は承知しても、刀が承知せん』

然は溝部に眼くばせをする、兵馬は島田虎之助仕込みの腕である、隊の中で、試合をしても、井村や溝部では歯が立たぬ、で、拔き合せやうとするのも、半は行きがゝりの虚勢、兵馬は、つめ寄せた二人を見つめながら、

『さう、喧嘩腰で出られては困る、君が覺えが無ければ、何と云はれても、腹の立つことはないではないか、拙者も君の云うた事につき合うて用もない此の座敷へわざ〳〵出て來たのだから、君も拙者の問ひに答へて貰ひたい、相見互じや』

『粕理窟を云ふ場合でないぞ、二言と盜賊呼ばゝりをなさば、それこそ用捨はない、その外に聞きたいとは何だ』

『うむ、右の菱屋の――待て盜賊の件ではない、菱屋太兵衛の女房お梅と申すものゝ行方を、若しや、君が知つては居らんか』

「菱屋の女房が、どうしたと」
「行方知れずになつた」
「それが、どうした」
「その行方を、若しや君が知つて居らんかと」
「何を知るものか」
井村は、拗いで振り捨てるやうに首を振る、
「主人の太兵衛が申すには、取調べの筋があつて南部屋敷へ二度まで呼ばれて、二度目から今以て歸らんと云ふ、不思議ではないか」
「それが如何したといふのだ、それを何で拙者に問ひたゞす廉がある」
井村は擬勢を張つて、兵馬の問を一々刎ね返さうとして居るらしいが不安の念は言葉つかひの亂れて行くのでわかるのです。

「なら、君は、その事に就て一切知らんのか」
「無論じや」
「さう君が強情を張るならば此方にも覺悟があるぞ」
「覺悟とは何だ」
「君の其の手の傷に物を言はせる」
「ナニ」
「その傷を發ひたら口が開く筈じやそれが忌やならば、たゞ一言、太兵衛女房梅の在所を知らせて呉れ、それだけでよい」
「知らんといふに」
「飽くまで強情を張るか」
「腕にかけてもだ」
「然らば、拙者は貴樣を斬るぞ」

兵馬は刀を引き寄せる、井村、溝部は抜かうとする、

『溝部君』

兵馬は、溝部の方を見て、

『君は新参だから、この事には關係がない、其處に默つて見て居るがよい、併し、強いて加勢をするつもりならば、拙者は、眞先に君を斬るが如何だ』

兵馬は凛として溝部に宣告を下す。溝部はその後、井村の紹介で入つたのだから、菱屋の一件には何の關係もない、さうして兵馬の劍道には怖れをなして居る、行きがかり上、井村に加勢をしやうとして見たが、むざ〳〵命を投げ出すは餘りに張合のない心地がする。

『うむ……』

煮え切らない、含み聲で、氣を折られた容子が見える。

『よし、君は其處に居て、拙者と井村との勝負を見届けて置いて呉れ給へ』

斯う云はれて、溝部は、いよ〳〵行詰まつたらしく、中立とも云はず、加勢とも云はず、柄にかけた手の扱ひに困つた樣子でしたが、

『いや、御兩所、まあ〳〵待ち給へ』

急に變つて、留め役と出かけ、

『どちらにしても同志打はよくない、拙者に任し給へ、井村、君何か知つて居るなら、宇津木君に言つてしまい給へ』

『知らんといふに』

井村は、この時、其處にあつた盃洗を取るより早く、兵馬を目がけて投げつけたのが、盃洗は床柱に當つてガツチと碎ける、水は飛んで室内に雨をふらす、さうして置いて井村は、刀を抜きかけて來る

かと思ふと一散に逃げ出します。

兵馬は、遂に井村を取り逃がし、組み付いた溝部を抛り出して、ひとり角屋を出て來た。その道々思ふ樣

『自分は、新撰組を出やう、元より自分の目的は、新撰組に加盟する事ではなかつた、たゞ、兄の仇を討たんが爲、近藤土方等先輩の力を便りに、つい〳〵其の組の一人とはなつたが、どうも久しく足を留むべき處でないやうだ』

十三

『與八ではないか』

『これは方丈樣』

『この頃、面を見せないからどうしたかと思つた』

『この頃は仕事が忙しいもんだから、つい御無沙汰をしました』

『ちと、やつて來い、この間、お前に運んで貰つた石をコッ〳〵やつて居るよ』

『お地藏樣をお彫りなさると云つたあの石かい』

『さうだ〳〵』

『方丈樣、お前は繪も書けば字も書く、彫物なんぞもなさるだね』

『あゝ、何でもやるよ、畑つくりでも米舂きでも一人前は樂にやるよ』

『感心なものだね』

『生意氣な事を云うな、それはさうと、與八遊びに來い、檀家から

貰つた牡丹餅や饅頭がウンとあつて、本尊様と俺とでは到底も食ひ切れねえ、お前に好きほど食はしてやる』

『本當かい』

『嘘を云ふものか、米の飯も食ひたければ食はしてやる』

『濟みましねえ、それじや呼ばれに行く事にすべえ』

『江戸の土産話でも聞かせてくれ』

『それから方丈様、いつか、教へてもらつた地藏様の歌、あのつゝきを教へてお呉んなさいまし』

『和讃かい、あれも教へてやるよ、何處まで覺えたか忘れやしまいな』

『忘れるものか、十にも足らぬみどり子がといふ處までだ』

『さうか、お前の覺え込みの惡いのには閉口だが、覺え込むと忘れないのが感心だ』

海藏寺の東妙といふ坊さんは、氣の輕い、仕事のまめな方丈様で、與八とは大の仲よしです。

『與八、彈正殿の三年忌になるで、早いものだなあ』

『さうだなあ、大先生が死んでから、もう三年も經つかなあ』

『わしも、碁敵が一人減つて淋しいや、併しまあ仕方が無え、時にあの伜殿にも困つたものだて』

『若先生か』

『龍之助め、今何處に居る事だか』

と云つて話をするうちに寺へ着く。

東妙和尚は、廣い庭の眞中に植られた大きな枝垂櫻の下の日當りの

よい處に莚を敷いて其の上で、石の地藏をコツ〳〵と刻みはじめる。

郁太郎を背負つたなりで與八は和尚の傍へ坐り込んで

『出來たな、やあ相好のいゝ地藏樣だ』

『これから錫杖の頭と六大の環を刻めば、あとは開眼ぢや』

『方丈樣、何處へ此の地藏樣をお立てなさるだね』

『うむ、これを立てる處か、それはな、ちつとばかり風の變つた處へ立てるつもりだよ』

『何處だえ、この寺のお庭かえ、この櫻の下あたりが宜いな』

『いや、こんな處じやない、わしは、ずつと前から思ひついて居たのじや、ほれ大菩薩峠の天邊へ持つて行つて立てるつもりだ』

『大菩薩峠の天邊へ』

『名からしてふさはしいと云ふものじや、地藏菩薩大菩薩、何と宜い思ひつきだらう』

『そりや方丈樣、好い思ひつきだ』

『賛成かな、それで與八、出來上つてから、こゝで開眼供養といふのをやつて、それから大菩薩峠の頂へ安置する』

『成程』

與八は頻りに感心をして、

『その時は、方丈樣、俺がこのお地藏樣を峠の天邊まで背負つて行つてやるべえ』

『そいつは面白い、この石も、お前に擔いで來てもらつたのだから御尊體も、お前に持つて行つて貰うことにしやう』

『有難え、々々々、さうすると、俺も功德になる』

「結構々々、南無延命地藏大菩薩、おん、かかか、びさんまえい、そわか――」

「方丈樣」

「何だ」

「あの地藏樣の歌のつゞきを敎いて貰いてえ」

「和讃か」

「西院河原地藏和讃、空也上人御作とはじめて――」

これは此の世のことならず、
死出の山路の裾野なる、
さいの河原の物語、
聞くにつけても哀れなり、
二つや三つや四つ五つ、
十にも足らぬみどり子が、
こゝまで覺えたから其の次を」

「よし〳〵、わしが唱へるから、あとをつけろや」

東妙和尙は石鑿を地藏の御衣のひだに入れて直しながら、

さいの河原に集まりて、
父こいし、母こいし、
こいし、こいしと泣く聲は、
興八は、あとをつゞけて、
さいの河原に集まりて、
父こいし、母こいし、
こいし、こいしと泣く聲は、

和尙は先へ進んで、

この世の聲とは事かはり、
悲しさ骨身を透すなり、
『方丈様、何だか悲しくなつちまつた』
與八の眼には涙が一杯です。
『有難い地藏様のお慈悲じや、涙もこぼれやうわい、我々凡夫の涙は、蜆貝に入れた水ほどのものじや、地藏様の大慈大悲は大海の水よりも、まだ〳〵廣大、それ我々凡夫は、一寸したことにも悲しいの嬉しいの、すぐ安つぽい涙じやが、この無佛世界の衆生の罪障を御覽になる大菩薩の、御涙といふものはドノ位のものか測り知れたものでない、南無延命地藏大菩薩、おん、かかか、びさんまえい、そわか』
『さういへば、さうだなあ、俺らは一人の子供の身の上でも心配すると泣き切れねえ事がある、お地藏様がこの世間を御覽になつたら嘸辛いことだんべえ』
『さうだ〳〵、それから火ぎを唱へて聞かすぞ——』
彼のみどり子の所作として、
河原の石を取り集め、
これにて回向の塔を組む、
一じゆ組んでは父の爲、
二重、組んでは母の爲、
三重、組んでは古里の、
兄弟わが身と回向して、
晝は一人で遊べども、
日も入會の其の頃は、

地獄の鬼が現れて、
やれ汝等は何をする、
婆婆に殘りし父母は、
追善作善のつとめなく、
たゞ明け暮れの嘆きには、
むごや悲しや不憫やと、
親のなげきは汝等か、
苦患を受くる種となる、
われを恨むることなかれと、
くろがねの棒をさしのべて、
積みたる塔を推しくづす、
「如何じや、與八、怖いことではないか、頑是ない子供が、やつと

積み上げた小石の塔を鐵の棒を持つた鬼が出て來て、皆んなつきくづすのじや、やあ、これを人事と思つてはいけないぞ、追善追善のつとめといふをせぬ者には、皆んな鬼が出て來るじや、何をしても皆成り立たないぞ、皆くづれ出すじや、よいか人事と思つてはいけないぞ」
「あに、人事と思うべえ、一々腹の底まで泌み込むだ、有難え〳〵」
「さあ、その次だ——」
その時、能化の地藏尊、
ゆるき出でさせ給ひつゝ、
汝等いのち短くて、
冥途の旅に來るなり、
婆婆とめいどは程遠し、

われを冥途の父母と、
思うて明け暮れ頼めよと、
幼き者を御ころもの、
もすその中にかき入れて、
哀れみ給うぞ有難き、
いまだ歩まぬ、みどり子を、
錫杖の柄にとりつかせ、
忍辱、慈悲のみはだへに、
抱きかゝえ撫でさすり、
哀れみ給うぞ有難き——
南無延命地蔵大菩薩、おん、かかかびさんまえい、そわか」
「郁坊、よく聞いて置け——人事では無え」

與八はホロ〳〵と涙をこぼして、背の郁太郎を揺り上げる。

十四

今日は島原の角屋で大懇親會。
それは新撰組と大阪の大相撲とが大喧嘩をした其の仲違り。
小野川秀五郎の口の利き方がよかつたので、喧嘩の仲直りが出來た上に、新撰組が相撲の贔負となり、其の力で、近々壬生寺に花々しい興行を催すといふ。
近藤勇と、芹澤鴨とが正座に居る處へ、小野川秀五郎は盃をもらひに出かけて氣焰を吐いて居る。
この時、小野川はもういゝ年であつたが、氣負ひの面白い男で好く

飲む。

『小野川、貴様も大分いけるやうだが歳を取つたな』

近藤勇が云ふ、

『如何致して、相撲に年を取るといふはごわせぬ』

『負け惜しみを申すな、爭はれぬは額の皺と鬢の白髪、どうだ一番俺と腕押しをやらうか』

『いやはや、近藤先生、劍道にかけたら先生が無敵、力づくではこの秀五郎が前に子供でがす』

小野川は斯う云ひながら、前にあつた小碟をとつてバリ〳〵と噛み碎き

『歯の力だけが、こんなもんじゃ』

『愉快々々、も一つ飲め』

近藤勇は、小野川の老ひて稚氣ある振舞を喜んで話して居ると、芹澤鴨は、さきから、席を周旋して廻るお松の姿に眼をつけて

『今銚子を持つて立つた、あの可愛い女、あれは何處の子だ、ナニ木津屋の養女だと、さうか、行く〳〵は太夫にでもなるか、拙者が贔負してやるから此處へ來いと云へ』

お松は今日の忙しさに加勢に頼まれて來てゐたのを

『お松さん、あの正座の怖い面したお客様が、お前に御用だと申して居りますが』

囁かれて、お松は、

『只今參りまする』

この時、歌ふもの踊るもの、相撲を相手に腕相撲足相撲をするもの藝子へかぢりついて騒がすもの

『おい、庭で一丁行かう』

新撰組の沖田總司は、力自慢が嵩じて相撲を一人引つぱり出し、庭へ下りて四股を踏む、

『沖田川、しつかり！』

席は混亂して、皆椽先へ集まる。

芹澤鴨は、其れには眼もくれず

『お前は美い女じや、こゝへ坐れ』

目を細くして前へ來たお松の面を見る。

『御免遊ばせ』

お松は盃を戴いて下に置くと、

『わしは芹澤じや、度々、こゝへ遊びに來るが、お前の姿を見るは初めてだ、名は何と申す』

『松と申します』

『年は幾つだ』

『當て御覽遊ばせ』

『十六から八までの間、違ひなからう』

『そんな事でございませう』

『生れは何處じや』

『西國でございます』

『西國は』

『巡禮の出る』

『何』

お松も人に慣れて此の頃では餘り物に怖ぢなくなつた。其處へ

『芹澤先生、お流れを頂戴致したうございます』

罷り出たのは小野川秀五郎
『やあ、小野川か、それ』
盃を抛つてやつた、
『時に芹澤先生』
小野川は芹澤の前へ膝をすゝめて
『承はれば、先生には水戸の御出生、水戸と聞いて、この秀五郎も、お懐しうございますわい』
『貴様も水戸生れか』
『生れは違ひますが、長れながら烈公様に、一方ならぬ御贔負を受けて居りまするからに、水戸と承はれば、どうやら御主筋のやうな氣が致しまするで』
『成程、貴様は烈公の御機嫌伺ひに出かけるさうな、ちつとは儲か

るか』
『儲かると云はんすのは……』
小野川は肯かぬ氣ですから、芹澤が妙なことを云ふと、腹に据る兼ねて、ムッとする
『うむ、水戸は一體客な處じや、家中を廻り歩いてもトンと祝儀が出まい』
『芹澤先生、ちつと話が違ひます』
『違うとは何だ』
『世間には左様な眞似をして歩くものがないとは限らん、わしは、それが嫌ひじや』
『さうか、貴様は嫌ひか』
『水戸様から戴いた、お盃には、お手づから草體で「水」と書い

てござんすのじや」

「それが何うした」

「それが、秀五郎忠義の看板でございます」

「うむ、豪い奴だな、貴様は」

芹澤は皮肉な言葉で、意地悪く小野川を冷やかさうとする、此の度の噴嚏の落は近藤に取られて、それからメッキリ芹澤の人望が落ちた、それが癪にさわつて芹澤は、今宵も小野川に突かゝつて見る、小野川も虫が居ず無言で白けて居た時、

「小野川、ちと此方へ來い」

二三枚離れて居た土方歳三が小野川を呼びかける。

お松は、座敷の人混みに上氣して、ひとり誰も居ない室へ來て、ホッと息をついて、熱る頬を押えて居ます。と次の間で人のさゝやく聲。

「よいか」

「うむ」

念を押した聲と、頷いた聲。

「近藤の馴染といふ女は誰だ」

誰とも知れぬ人の聲、

「御雪、木津屋の御雪といふのだ」

「ナニ木津屋の御雪」

お松は聞くともなしに、耳に入つた名は自分の姉分になる御雪太夫の事ですから、思はず身が固くなる。しかも其話しの主の一人は最前、自分を呼びつけた芹澤鴨のやうです。

『それから、吉田氏』

といふのは、やつぱり芹澤鴨に相違ない、お松は次の間の私々話しを忌やでも立ち聞きをしなければ濟まないことになつたので、息を殺して居ると芹澤は、

『いよ〳〵近藤を片づけたら、次には君に引出物がある』

『引出物とは何だ』

『兵馬の首だ、宇津木兵馬の首を描者が手で取つてやる』

『兵馬――何の』

芹澤でない一人は、冷やかに言ひ切つた

『君は、兵馬を小伜と侮つて居るが中々さうでないぞ、あれほどに腕の立つ奴は、新撰組にも幾人とない』

『……』

『始終、君をつけ覗つて居る、兵馬一人ある以上は、君の身は危ない』

『今、何處に居る』

『つい、この近い處に居る』

廣間の方で哄と喊聲が起るこゝで二人の私語は紛れて聞えなかつたが、暫くして

『よし、やがて合圖をする、對手が對手だから隨分拔からず』

芹澤は斯う云つて席を立たうとするらしい、

『念には及ばぬ』

やがて、刀を提げる音、サワ〳〵と鳴る袴の音。

一旦立ち上つて芹澤は

『今いふ、御雪といふのは素敵な美人じや、近藤を片づけたら、君

に取持たう、君も女房が死んで淋しからうからな』
怖ろしい人々である、どうやら近藤勇を殺し、兵馬を殺し、近藤の
思ひ物御雪太夫を横取する……お松はこの上もない怖ろしい相談を
聞いてしまつた。
幸か、不幸か、芹澤はお松が潜んで居た方の襖を颯と開ける
『誰だ、そこに居るのは！』
『はい、私でございます』
お松は逃げ場を失つてしまつた。
『何をして居る』
『あの、つい氣分が惡いので、こゝで息を休めで居りました』
芹澤は、近寄つて、
『お松ではないか』

『はい』
『うむ』
芹澤は思案して、跪いて居るお松の手をとつて、
『拙者と一緒に來い』
『まだ、あのお座敷の方に用事がありますから』
『用事があつてもよい、一緒に來い』
お松は、手をとられて、羽掻じめのやうな形、芹澤は左の手に刀、
右の小脇へ輕々とお松を抱えて、
『聞いたな』
『いえ、何んにも』
『聞いてもよいわ、お前ならば聞かれても大事ない』
『何卒、御免遊ばして』

『怖い事はない』
誰であつたか、隣に居た人は此の場合にも口を一つ挿まなかつた。
芹澤は、も一つ次の間へお松をつれて來て
『お松、拙者は、お前を贔負にする』
『有難う存じます』
『お前は木津屋の娘分だというたな』
『はい、左様でございます』
『俺の處へ遊びに來い、お前は幾つといふたかな』
『あれ、どうぞ、お放し下さい、お座敷へ出ませぬと叱られまする』
『叱られたら、この芹澤が謝罪まつてやる、どうも熱い、酒のせいで頬が熱い』
芹澤は、わざとお松の面に近く酒にほてつた頬をつき出して、

『何時、太夫のひろめをする、その時は一肌ぬいでやるぞ』
『有難うございます、お座敷へ出ませぬと……』
『いや、宜しい』
『可けませぬ、ぞうぞ、お放し下さい』
『わからぬ奴じや、拙者が承知と申すに』
『御戯談をなさいますな』
『戯談ではない』
『お放し下さい』
お松は、もう一生懸命です。力を極めて芹澤を突き飛ばして見たところで知れたもの、芹澤の腕は、大蛇が兎を締めたやうなもの、
『あ、助けて下さい』
お松は絶え入るばかり叫ぶ、芹澤は一寸手をゆるめ、

『これ騒ぐな、何も怖いことはないではないか、泣くのか、何も泣く事は無からう、明日の日太夫の位を張らうとするほどのお前ではないか』

『芹澤様とやら、お前は、新選組の隊長でありながら、わたしのやうな弱いものを苛めて、どうなさいます、どうぞお許し下さいませ』

お松は哀みを訴へて虎口をのがれやうと試むる。

『何の、お前を苛めるものか、負にしやうといふのじや、な、これから新選組の隊長が、お前の後楯にならうといふのではないか』

『芹澤氏、何をして居る』

この時はじめて室一重に居た誰とも知らぬ一人が聲をかけた

『うむ、いや、取調べて居る』

芹澤が、お松を見付けて苛めつけて居るのを、最前から見もし聞きもして居ながら、今になつて只一語。

『何をして居る』

咎めた聲は、怖ろしく沈んだ男の聲、芹澤も多少極まりが悪く

『取調べて居る』

と胡麻かして、それでもお松を放さうとはしない

『取調べが濟んだら、早う御處分をなさい、大事の前の小事から謀が破れるわ』

『其れも、さうじや』

芹澤は澁々と身を起し

『とは云へ、この女、油斷がならぬ』

『お斬り捨てなされ』

事もなげに隣室から走る一語、お松の骨を刺す冷たさがある

「斬り捨てるほどの代物でもない」
「然らば拙者が預からう、貴殿は早く同志を沙汰して、隨分拔かりの無いやうに、何しても相手が相手だ」
「では、この女、しばし君に預ける」
「いかにも、預かり申す」
「大事に扱へ、これはソの御雪が妹分じや、無茶な事をしてはならんぞ」
「兎も角も拙者が、よきやうに預かる」
「さうか」
芹澤は殘り惜しさうな面をして、お松を隣室に抛り込んで、自分はこの場を外して行く。
「これ女」

お松を預かつた人は沈んだ聲。
「はい」
「お前は誰かに頼まれて、此の隣室へ來たか」
「いゝえ、誰にも頼まれたのではございませぬ、席の騷がしいのに上氣して、氣を休めやうと思ひまして」
「何はしかれ、我々が密談の席へ近寄つたが不運じや、わしが赦すまで、こゝに居れ」
「はい、決して一言も、あなた樣方の、お談しを伺つたわけではありませぬ故、どうぞ、お赦し下さいませ」
「可かん、もし、お前が聲を立てたり、逃げ出さうとしたりすれば不憫ながらお前を斬る、拙者がこの席を動くまで凝として居れば、無事にゆるしてやる」

『はい』

この、お松を預かつた人といふのは机龍之助です。お松の爲にも兵馬の爲にも、仇たる机龍之助が、芹澤鴨一派の頼みで、これから近藤勇一派を暗殺しやうと、その合圖が整うて、こゝに來合せたもの。机龍之助は、薄暗い行燈の火影を斜に蒼白い面に浴びて、小肴を前に、チビリ〳〵と酒を飲んで居ます。

お松を前に置いて、縛るでもなければ嚇すでもなく、さりとて冗戯を一つ言ふでもなく、龍之助はチビリ〳〵と酒を飲んで居る。時々酒の手を休めては、眼をつぶつて凝と物を考へ込む。

『うーむ』

考へ込むと、深い吐息で、手に持つ猪口がフラ〳〵と傾いて酒がこぼれさうになる、氣がついてグッと呑んで、餘滴をたら〳〵と水の

上に落して、それを見るともなく見つめて無言。

『動けば斬る』

この物すごひ武士の唱へた呪文で、お松は金縛りにされてしまつた。酌をしろとも云はず、また一杯ついで靜かに口の處へ持つて行き、唇へ當やうとしたが、急に思ひ返したやうに猪口を下に置いて、

『うーむ』と吐息。

右の手を上げて、頭を押えてうつむく、しばらくして、また屹と頭を上げて、猪口をとり、お松の方をボンやりと見た。

『お前は、木津屋の娘じやさうな』

『はい……』

龍之助は、一口飲むと急に咳をして酒を吐き出し、あはてゝ猪口を置いて、懐紙で四方を拭き廻す。

『あの、お武家様』
お松は一生懸命で口を切る、
『何だ』
『何も存じませぬのでございますから、どうか、お赦し遊ばして』
『可かん』
『主人も心配して居りませうし、何も知らないのでございますから』
龍之助は、輕く首を左右に振りて不答。
さしも騒がしかつた今宵の宴會も、存外早く形がついて、その大半は歸つた樣子、廣間の方では、まだ相當の人聲であるが、その半分の人なき間毎の寂しさは急に增した。
お松は、急に何だか身の毛が立つやうに覺えた。といふのは最前芹澤につかまつてからの怖ろしさと、默つて酒を飲んで居る此の怪し

の武士の前に居る怖ろしさとは、怖ろしさが違う。
『この人は幽靈ではあるまいか』
とさへ思はれた位で、席が靜かになるにつれて行燈が薄暗くなる、その影で吐息をつきながら、一口飲んでは置き、唇まで持つて行つては止め、首を垂れて見ては、また屹と刎ね返し、座の一隅に向つて眼を据えるかと思へば、トロリとして、お松の面を見る。
その怖ろしさは、總身に水をかけられるやうで、ゾク〳〵溜らない位です。
『其、其處へ來たのは誰だ』
龍之助は、お松の坐つて居る後の方へ眼をつけて突然斯う云ひ出した。
『え、誰れも……誰方も來てお居ではございませぬ』

お松は、身を捻じむけて、後を顧みながら答へる、

『さうか、それでよい』

龍之助は、グッたりと首を垂れて、

『うーむ』といふ吐息、

『あれ、幽霊が――』お松は何に驚いたか

『ナニ、幽霊』

龍之助は勃然と、垂れた首を上げる。

『あゝ、怖かつた、今こゝへ』

『何、今こゝへ何が來た』

『女の姿が――』

『女の姿が――』

龍之助は、左の手をさし置いた刀にかけて、室の中を見廻す。切れ

の長い目は颯と冴え返る。

お松は、知らず〳〵龍之助の膝に身を寄せて居た。

『ハ、、、』

龍之助の笑つて打ち消す聲は却つて物のすさまじさを加へる。

『何を、馬鹿げた』

お松は、龍之助の傍を離れ得ない、龍之助の傍を離れられない位に怖ろしいものを見た。

『あの、お武家様、昔から、この部屋には幽霊が出るやうに申し傳へてあります』

『この部屋に幽霊が』

改めて、龍之助が、この部屋を見廻すと、「御簾の間」であつた。

『昔、九重といふ全盛の太夫さんが、こゝで自害をなされました』

『ふーむ』
『その太夫さんは、やんごとなきお方の落し胤、何の仔細があつてか、わたしは、よく存じませねど、お身なりを平素よりは一層華美やかにお作りなされ香を焚いて歌をお書きになつて、懐剣でこゝを……』
お松は、自分で自分の咽喉を指さして戰慄する。
『ふーむ、そんな由緒のある部屋か』
『でございますから、怖ろしうございます』
『怖ろしい事はない』
龍之助は、また首垂れて酒を飲み出す、怖ろしさから傍へ寄つたお松の化粧の香りが紛として其の酒の中に散る。龍之助は我知らず面を上げると、やゝ、あちら向きになつて居たお松の、首筋から頰へ

かけて肉附よく眞白なのに、血の色と紅の色とが通つて、それに髪の毛が、ほつれて輕く搖いで居る。
自分の膝には、お松の手が置かれてある――龍之助はそれを見る、涸れ果てた泉に甘露が湧く、龍之助も前にはお濱を斯うして行て、心を戰かした事もあつた。
『おゝ怖い』
お松は、はじめて、自分の所在を知つた、その身は餘りに近く、その手が龍之助の膝の上にまであつたのに氣がついて、定まりが惡い――あわてゝ身を縮めた時に、龍之助が燃えるやうな眼をして、自分を見据えて居たので赫と上氣した。
『お前は幾つになる』
『いゝえ』

お松は、つかぬ返事をする。
『静かになつたな』
『あれ、また何か！』
お松は、床の間の方を見る。
『何』
龍之助は猪口を取り落した。
お松が今云ふた九重の亡魂でなければ、龍之助の身の中から湧いて出る惡氣。
この御簾の間は時として何處からともなく風が吹いて來る、その風が習々として梁を渡り或處まで來て、ハタと止まると、いかにも悲しい歎息の聲が續く。
誰も、そんなものを聞いたものもない癖に、そんな噂をする者はあ

る、ホントに其れを聞いた人は、命を取られるのだといふ、お松は今それを聞いた——と自分ではさう信じてしまつたらしいのです。
龍之助は手が戰いて猪口を取落した。
その取落した猪口を拾ひ取ると、何と思つたか、力を極めて、それを室の巽の柱の方向を目がけて發止と投げつける。
猪口はガッチと碎けて夜の嵐に鳴瀧のしぶきが散るやうです。
と見れば、龍之助の眼の色が變つて居る。
龍之助の眼の色は、眞珠を水に沈めたやうな色です。水が澄む時は冴える。水が濁る時は曇る。冴える時も曇る時も共に沈んだ光があつた。今は其の光が浮いて來た。
猪口の碎けて飛んだ室の中を、こゝと目當のなく見廻した時の眼は彼の音なしの構にとつて意地惡く、相手を見据えた時のやうな落着

きがなく、不安とさうして散漫とが漸〳〵行き渡る。

「うむ――」

額を押えて力なく折れた。

「どうか成さいましたか」

「頭が痛い」

「それは困りました」

「眼が廻る」

「お薬を差し上げませう」

お松はふいと立つた、

「いや、それには及ばん」

「それでは、お冷水を」

「何も要らん」

龍之助は額を押えて薬も水も謝絶る。併し乍ら餘程の苦しみには、うつむいた面が下がるばかりです。

お松は、この時ふいと氣がついた、逃げるなら此の間である――

「待て！」

うつむいた面がバチのやうに上がると、龍之助は刀を取つて居た。

「逃げるか！」

「いゝえ」

「そこへ坐れ」

その眼で睨められた凄さ、この人の身の廻りには、魔物のやうに物を引く力がある、夢で怖いものに追はれたやうに逃げやうとすれば足がすくむ。

「うーむ」

龍之助は、また額を押えて唸る、そのうなり聲を聞くと地獄の底へ引き込まれさうです。

『あゝ――』

龍之助は、そろ〳〵と面を上げて、

『これ〳〵女』

思ひの外靜かな聲で、

『妙な氣持になつた、お前に少し聞いて貰ひたいことがあるがな』

『何でございませう』

『いや、拙者も國を出てから長い事になるが思ひ出せば子供が一人ある』

何といふ話頭の變り方であらう、併し其の言葉には、何とも云はれぬ痛々しさがあります。

『お子樣がお有りなさる』

『郁太郎と名をつけて男の兒じや』

『はい』

『若し緣があつて、お前が其の男の兒に[illegible]ふやうな折もあらば、劍術をやるなと父が遺言した、斯う申傳へて貰ひたい』

『そのお子樣に、あなた樣が御遺言』

『さうだ、生前の遺言じや、拙者の家は代々劍術の家であつたが、もう劍術をやめろと言つて貰ひたいのじや』

『それは、如何いふ理由でございませう』

『別にわけはない』

この不思議な人の云ふ事も爲ることも、一々、この世の人ではないやうで幹も末もない。

「承知致しました、して其のお子様は、お母さんと御一緒に今お國におゐでなさるのでございますか」

「いや、さうでない、母といふ奴、拙者には女房じや、それは居ない」

「お母さんも、お亡くなりなさいましたので」

「うむ――俺が殺した」

「まあ、あなた様が手にかけて！」

「手にかけて殺した！」

「何といふ惨い事……」

「芝の増上寺の公原で、松の樹へ縛つて置いて、この刀で臍を突き透した！」

武藏太郎を取り上げた机龍之助は、矢庭に立ち上がつて眼が吊り上がる。

「あれ――危ない」

立ち上がつた龍之助は、よろ〳〵と足がよろめくのを踏み締めて、

颯と刀の鞘を外した。

「誰か來て下さい！」

お松は、この時、はじめて絶叫することが出來た、

「騒ぐな！」

武藏太郎は閃々として、秋の水を潜る鮫のやうにひらめく。

「あれ危ない、誰か來て下さい」

「騒ぐな！」

龍之助は、刀を横より斜に振つて、切先が襖へ觸れると、ハラリハラリ御簾の形はくづれる。

『お武家様が氣が狂ひなされた！』

龍之助が、眞に人を斬るつもりで刀を拔いたのならば、最初の一閃でお松の命は無い筈でありますー――逃げ廻るお松の身に及は觸れないで、あらぬ方を見廻しつゝ振り舞はす切先きは襖、疊、柱の嫌ひなく當り散らして龍之助の足もとはよろ〳〵――正しく氣が狂つたものに違ひない。

『やあ』

薄ボンヤリと光つて居た罪のない行燈は、眞甲から斬りつけられ、燈火はメラ〳〵と紙を嘗める。

龍之助は、行燈が倒れて、火皿の燈心が紙に燃えうつるのを見て、立ち止まつて笑ふ。

お松は、この間に逃げ出した。多くの人はお松の叫び聲でバラ〳〵と此處へかけつける、

龍之助は、襖にうつらうとする火の色を見て笑つて居ます。

十五

その晩、芹澤鴨は早く宴會の席を出て壬生の屋敷に歸り愛妾のお梅を呼び寄せる。お梅といふのは先頃町家の女房を强奪して來たそれです。

芹澤と一緒に歸つたのは、其の腹心平間重助と平山五郎。

芹澤が早く席を切り上げて歸つたのも珍らしいが、今宵は非常に機嫌がよくて、お梅を相手に飲み直してゐると平間重助は、その馴染なる輪違ひの糸里といふ遊女、平山五郎は桔梗屋の小榮といふのを

つれ込んで、この三組の男女は、誰憚らぬ二次の酒興中、芹澤は得意げに云ふ事には、

『いよ〳〵拙者の天下である、明日になつて見ろ譯る事がある』

斯う云つて、芹澤はお梅に酌をさせて頻りに飲んだ。

芹澤はお梅を抱いて快く眠つた。屏風を建て廻して同じ廣間の中へ、平間と糸里、平山と小榮の二組も、床を展べさせて夢に入る。

芹澤が欣々として居たのは近藤を計り得たと思つたからです。今宵の宴會の終りに近藤勇は、その馴染なる木津屋の御雪を呼ぶか、御雪の處へ行くか、然らずば晩くこの屋敷へ歸る。その隙を見て多勢で暗討、人の手配りに拔かりなく、殊に其の手利きの一人として机龍之助を賴んで置いた。明日になれば、首のない近藤勇の死骸を、島原界隈の何處かで見付ける事が出來る。

そして新選組の實權を自分の一手に握る、これを根據としてやがて一國一城の望を遂げるといふ。

處が、それよりズット前に、近藤勇は、土方歳三と沖田總司と藤堂平助とをつれて、駕籠にも何にも乘らずコツソリと裏の方から此の屋敷へ歸つて來て、居るか居ないか譯らない位の靜かさで各々近藤の居間に集まつて居たのを芹澤等は些とも知らなかつた。芹澤等がいよ〳〵寢込んでしまつたと見定めた時に近藤勇だけは平服、土方と沖田と藤堂と三人は、用意の黑裝束。

三人は長い刀を拔きつれて、芹澤等が寢て居る間へ向つて行く、近藤勇は、其のあとから刀を提げて、凄い目を光らかしながらとついて行く。

寢て居る襖を開けたけれども知らない、酔つた紛れに夜具を撥ねの

け女も男もだらしのない寝すがた。
土方はッカ〳〵と進んで其の寝すがたを調べて見た。
『ふん、これが平山、女は小榮だな』
『平間に絲里か、不憫ながらこれも相伴、さて大將は……』
やゝ高い聲で云つたけれども、まだ覺めはしない。屏風の中をのぞいて見ると、お梅は褻衣の肌もあらはに芹澤は囂々と鼾が高い。
土方はニッと笑つて、次の間の入口に立つてゐた近藤勇に合圖するこの時、小榮と寝て居た平山五郎がふいと眼をさます。
眼をさまして、さすがに平山も其の樣子の變なのに驚いた。枕を上げやうとする途端を藤堂平助がたゞ一太刀。
平山の首は宙天に飛んで一緒に寝て居た小榮の面に血が颯とかゝる。小榮は夢を破られてキャーと叫ぶ。

この時早く、芹澤とお梅との寝て居た處の屏風は諸に押し倒されて三人の黑裝束は其れにのしかゝると見れば、屏風の上から蜂の巣のやうに、續けざまに下なる芹澤を目がけて柄も拳も通れ〳〵と突き立てる
『わーッ、何者だ、無禮者め！』
芹澤鴨は絶叫しつゝ、片手を枕元の刀にかけながら屏風を刎ね返さうとする。
『助けて下さい――』
お梅は苦叫悶叫。
快樂の夢を結んだ床は血の池の地獄と變る。芹澤は股、腕、腹に數ケ所の深傷を負うたが其れでも屈しなかつた。力を極めてとう〳〵屏風を刎ね返して枕元の刀を拔いて立つた。

芹澤と雖も慓悍無比なる新選組の頭どまで立てられた男である、況して手負猪の荒方である。

敵は誰ともわからぬが、相手はそんなに多數ではない、土方、沖田藤堂の三人をめがけて切り込む太刀の烈しい事、それをまた三人が飛鳥の如く、前に飛び後にすさつて突き立て斬り立てる目ざましさ殊に土方歳三は小兵であつて、その働き自在。

小榮は飛び起きて厠の中へ逃げ込む、平間重助と絲里は最初夜具の上から一刀づゝ刺されたけれども幸に身に當らず此の室を逃げ出した。近藤勇は、それを見たけれど、見のがし。

『おゝ、汝れは土方だな』

重傷の中から、芹澤鴨は黒裝束の一人を土方歳三と認める、大方其の輕妙な身の働き、刀の使ひぶりが、彼の眼に見て取れたからであらう。

『うむ、如何にも土方だ』

『卑怯な！なぜ尋常に來ぬ、暗討とは卑怯な』

『默れ〳〵、これが貴樣の運命だ！』

勢ひ込んだ一太刀が、芹澤の右の肩、

『むー』

これは今までの傷の中、一番深かつた、芹澤は遂に刀を持つに堪へなくなつた。

『エイ』

左から來た沖田總司の一刀は、横に額から鼻の上まで撫でる、

『おう——』

芹澤は揑と倒れた、土方歳三は直ぐに其にのしかゝる

『殘念！』
芹澤は土方に刀を咽喉に當がはれた時に叫ぶ、
『土方待て』
近藤勇は進んで來て、
『芹澤、拙者が解るか、拙者は近藤じや、恨むなら此の近藤を恨め！』
『汝れ近藤勇！』
恨みの一言を名殘、土方歳三はヅブりと、芹澤の咽喉を刺し透してしまつた。
『これ、お梅』
藤堂平助は慄えて居たお梅の襟髪を取つて、
『よく見て置け、これが見納めだ、貴樣の可愛ゆい殿御の最後のざ

まは此れだ』
『どうぞお免し下さい』
『併し美い女だな』
『芹澤が迷うだけのものはある』
藤堂と沖田とは面を見合せて、土方と近藤との方に眼を向ける。助けやうか殺さうかとの掛念。
近藤勇は首を縦に振らなかつた。
沖田は女の弱腰を丁と蹴る。
『あれ——』
振かぶつた刀の下に、お梅は肩先から乳の下にかけてザックと一太刀。虚空を摑んで仰けぞると息は脆くも斷えた。
芹澤の屍骸の上には、夜眼にも白くお梅の身が共に冷たくなつて折

り重なつて居る。近藤勇をはじめ四人は、その儘にして置いて此の場を引き上げた。

滑稽な事は、其の翌日壬生寺で、昨夜殺された芹澤鴨の葬式があつたが其の施主が近藤勇であつた事。勇は平氣な面をして自分が先きに立つて燒香もすれば人の悼辭も受ける。

會津侯へは、昨夜、盜賊が入つて其の爲に芹澤が殺されたと届けたこれも滑稽な話で、新選組の屯所へ入る盜賊が有ると思ふのも、有つたと届けるのも、共に虫のよい骨頂であるが、表面はそれで通つた。

新選組の内訌も、これで片がついて芹澤の分子は二三人、姿をくらました者もあつた。勘定方の平間重助なども逃げてしまつたが、大體は大した變りなく、其の全權は近藤勇の手に歸して、土方歳三は其の副將となる。近藤勇が京の地を震はすのはこれから。

十六

夜明け烏の聲と曉の風とで、ふと氣がついた机龍之助は、自分の身が、とある小川の流れに近く、篠藪の中に横はつて居ることを知つた。それでも刀だけは手から離さず、着物は破れ裂けて、手足には突き傷かすり傷。

『あゝ』

起き返らうとしたが節々が痛い、靜止として居れば昏々として眠くなる、小川の縁へのたつて行つて水を一口飲んで、やつと氣が定ま

る。

どうして、こんな處へ、あゝ、あれからあれ、あれまでは確であつた、あれから刀を拔いて……さてあの少女は如何した、間毎々々を荒れ廻つて、さうして庭へ下りた、多勢に圍まれた幾人か切つたに相違ない、血もついて居る、それから鐵砲といふ聲が聞えたやうだ それを聞くと庭の大きな松の樹にかけ上つた飛び下りたのは內か外か、それから闇を駈て駈廻つた――龍之助は今や正氣に復して、昨夜來の事を朧に辿つて行つて見ると、さあ、芹澤との約束だ！

遲い〳〵、もう夜明けだ、芹澤との相圖は丸で滅茶々々、

『已むを得ん、是非がない』

龍之助は呟いた、兎も角も夜の明けぬ內に何とかせねば、幸ひこゝは人目に遠い處ではあるけれど、このなりでは何處へも行けない。

向うから人が來るやうだ。

この篠藪の裏は堤、それを傳うて人の草履の音が聞える。

龍之助は、その人を待つて居た。

其の人は提灯を持つて居たけれども夜明間近の空で灯は入れて居なかつた。

『もし』

龍之助は篠藪をかき分けて、のたり出ながら言葉をかける、

『はい』

通る人の聲は慄へる、

『卒爾ながら……』

『はい……はい』

立ち止まつた人は股をふるわす、

『道に迷うた者でござるが』
龍之助の姿を見た通りがゝりの人はべタリと地面へ坐ってしまい、
『はい、どうぞ命ばかりはお助けを願ひまする』
空提灯を投げ出した
『いや、拙者は悪者ではない』
『ど、どうぞ、お助け、伜が急病でお醫者様へ參るのでございます』
『これ、思ひ違ひを致すな』
『持ち合せは、これだけ、これを差上げまする、命ばかりは、命ばかりは』
縞の財布を、懐から出して、龍之助の前に置くや、後へ蹙るやうに退ると、土手から田圃へ轉げ落ちる、轉げ落ちると共に田圃中を一目散に逃げ出した。

『思ひ違ひをしたと見える、粗忽かしい奴だ』
龍之助は苦笑ひをして、其處に投げ出されてあつた財布に眼がとまる。彼は、やゝ躊躇して、それを拾ひ上げる、錢の重味はザタリとして相當の手答はある。
龍之助も今まで善い事ばかりはしてゐない。併し人の金錢に手をかけたのはこれが初めです。
河内の方から脱けて來た机龍之助、トボ〳〵として大和の國八木の宿へ入らうとして疲れた足を休める。
大和は古蹟と名所の國。行手を見れば、多武の峰、初瀬山、歴史にも、風流にも、思ひ出の多い山々が屏風のやうに圍んで居る、龍之助は今ついて來た竹の杖を道ばたに立てゝ、歩みを止めたが——彼

の姿を見れば大分變つて居る。

川勝の寺の堤で、賊と見誤られて財布を投げ出して行かれた、心にもなくそれに手をかけて見ると、人を嚇すことの容易いのに呆れる龍之助は、つい〳〵其處に待ち構へて、も一人通行の人を嚇して着物を剝ぎとつた、今身に纏ふて居る縞の袷がそれです。

差してゐるのは只一本の刀。

笠をかぶつて、右の風體で大和路を歩いて行く、誰が見ても渡り者の長脇差。その位にしか見えない。

彼の財布の中の金は、こゝへ來るまでに大方盡きた。

人の命を取ることゝ、人の財物を盜ることゝ何れが重い——人を斬ることを何とも思はぬ龍之助が、人の金錢をとつた事に苦悶するは何故であらう、譯のわからない話であるが、龍之助は、この事を苦にする。

大和の國八木の宿。

東は櫻井より初瀬にいたる街道、南は岡寺、高取、吉野等への道すじ、西は高田より竹の内、當麻への街道、北は田原本より奈良郡山へ、四方十字の要路で、町の眞中に札の辻がある。

龍之助は西から來て、この札の辻の前へ立つた——この札の辻の傍には大きな井戸があつて、四方には宿屋が軒を並べて居る、さしも客を爭ふ宿引も、ナゼか龍之助の姿を見てはあまり呼び留めやうともしない、これはまだ日脚の高いせいばかりではあるまい、龍之助は仰いで高札を見る。

檄

此回、外夷御親征の爲、不日南都へ行幸の上御軍議あるべきにつ

き其の節御召に應じて忠義を勵むべき……

これが書き出しで、本文は大分長い、龍之助は讀み下して見ると、それは御親征について忠勇の士を募集するといふ檄文で。誰が出したとも譯らないがたゞ「天忠組」とのみ署名してあります。

龍之助は、それを讀むには讀んだが腹が隙いて居ます。當時の志士の血を湧かした尊王とか攘夷とかいふことは、餘り龍之助には響かない。この時は、また例の事を好む壯士共が、惡戯をしたと位に考へて、それよりは腹の減つた事が、著しくこたえて來ます。何處ぞで飯を食はう、併し懷中が甚だ淋しい――立派な飯屋へは入れない、何か食はねばならん、町を少し行くと饅頭屋、黒崎といふところから出た名代の女夫饅頭、「黒崎といへども白き肌と肌、合せて味い女夫まんじう」と狂歌が看板に書いて出してある、この店へ入つて行

つた龍之助。

蒸籠を下ろして、蒸したてのホヤ〳〵と煙の立つのを、饑た腹で見た龍之助は、飛びついて頰ばりたいほどに思ふ、あゝ、さもしい！自分ながら抑えて居たのは束の間、黒い盆の上に山と盛つて出された時、夢中で、その一盆を平げてまた一盆、澁茶の茶碗を下に置いて

「亭主いくらになる」

「へえ、有難うございます、百五十文戴きます」

百五十と云はれて龍之助はハタと當惑する、懷へ手を入れては見たが實は百二十文しか無い。

「亭主、誠に相濟まんが」

龍之助は財布を逆さにして

『持ち合せが、これだけしか無い、百二十文――』

『何でございますと』

饅頭屋の亭主は、少しく眼の色を變へる。

龍之助が、もう少し如才なく詫をしたら、或は、それで負けて貰へたかも知れぬ、また此の店の亭主が、もう少し情を知つた人ならばそれで我慢したかも知れぬ、併し乍ら、龍之助は誰に向つてもするやうに、無い袖は振れぬ、無いものは拂えぬといふのが太てくされのやうにも取れば取れるので勘定高い亭主が承知しない。

『何と云つても、無いものは無いのじや』

龍之助は、ツンと言ひ切る。この場になつても龍之助には、これ以上の事は言へない。頭をたゝいて哀求するなどゝ云ふ事は、どうしたつて出來ないのです。

『宜しうございます、左樣ならば出る所へお出なさい』

亭主は襷を外して何處へか行かうとする

『待て、主人、何處へ行く』

龍之助は呼び止めると、

『この頃は諸國の浪人や、無頼漢が入り込んで商賣人泣かせを働いて困るじや、見せしめの爲、代官樣へ行き申す』

『待つて呉れ』

龍之助は此の時腰にさして居た刀を鞘のまゝ拔き取つて。亭主の前に置き

『では此刀を取つて呉れ』

『此刀を』

『うむ、わずか三十文の錢の爲に繩目の恥にかゝるのが忌やじや、

この一腰を抵當にとつてくれ』

『へえ、左樣でございますか』

三十文の抵當に刀一本。たとへ鈍刀にしろ引き合はぬといふ事はない。亭主の機嫌が少し直り、

『どうも、町人には不似合なものでございますが、では、一時それをお預かり申して置きませう』

龍之助は、その刀を其處に置いて、財布も小錢も置きつ放し。笠一つを持つて、ふいと、この店を出てしまひます。

『いや、どうも此の頃は惡い奴が近邊へ入り込むので、なに、わずか三十文の處を、少々手嚴しかつたやうだが、いくら饅頭屋だからと云うて甘くばかり見せて居られぬわい』

此の店を出た机龍之助。田原本の街道を取つて北へ歩いて行く。龍之助、最初の目的ならば東を目ざすが順であらうのに。

十七

處へ、田原本の方から早足に歩いてくる旅人。それは裏宿の七兵衛であつたが、摺れちがつて龍之助の方で、それと氣のつかなかつたのは無理もないが、七兵衛の方で龍之助に氣のつかなかつたのは、龍之助が、小荷駄の馬の蔭に見えがくれであつたのと一つには無腰であつたから、刀を差して歩く人のみを目ざした七兵衛の眼を外れたものと見えます。

八本の宿へ入つた七兵衛が、何心なく、寄り込んだは偶然にも彼の

『御免よ』

『はい、お出でなさいまし』

七兵衛が腰をかけたのは龍之助が置いて行つた刀の直ぐ近い所でした、

『こゝに怖かないものがある』

七兵衛は饅頭を食ひながら、さきほど龍之助が置いて行つた刀を、少し横の方に避けると、亭主は、

『お客様、其の刀をお買ひなすつて下さいませぬか』

『わしに買へと云はしやるか』

『へえ、たつた今食ひ逃げの抵當に取つた代物でござります』

『成程』

七兵衛は、手をのばして刀を此方へ引き寄せる。七兵衛も一寸した刀の鑑定位は出來る男であつたから、

『拜見しても宜しいかな』

『へえ、御遠慮なく』

『成程』

七兵衛は此の刀を拔いて、しばらく眺めて居ましたが、

『はてな』

首を捻つて

『親方、中身を外しても宜いかね』

『どうか、よくお調べなすつて』

七兵衛は目釘を外して、柄をとり拂ひ、その切つてある銘を調べて見ると、

『武蔵太郎安國、待てよ、こいつは可笑しいぞ』
七兵衛は思ふ、備前物や相州物の類であらば、この邊を通る人でも差して歩くに不思議はないが、餘り知られて居ない武藏太郎あたりを、この邊で差して歩く人があつたとは思ひがけない。
『親方、この刀を差して居た人といふのは、どんな風をした人だつたかね』
『さやうでございます、破落戸か、賭博打のやうな人體でもあり、口の利き方はお武家でございました、大方浪人の食ひ詰め者でございませう』
七兵衛は、さきから思ひ當ることがあるから、刀を見つめながら主人に問ふ。
『年の頃は』

『さやう、卅四五』
『面つきは』
『月代が生えて色が蒼白くて、眼が長く切れて』
『それだ！』
七兵衛は、その人を尋ねんとしてこれまで來たのです
『その人は、何方へ行つた』
『さあ、ちつとばかり前、あちらの方へ田原本の方へ行きました』
『田原本へ——』
七兵衛は忙はしく懐中へ手を入れて、
『親方、いくらになる』
『お客様、その刀もお買い下さいますか』
『買はう、賣つて貰ひませう』

『饅頭の方が八十文戴きます、刀はちと價が張ります』
『幾らで賣る』
『はい、五兩、ちとお高うございますが、仕込みが安くございませんから、へえ』
七兵衛は、默つて五兩と一分を其處へ拋り出して、其の刀を抱えてこの店を飛び出しました。
長谷寺の一の鳥居。机龍之助は其處へ立ち止まつて
『これ〳〵、巡禮衆』
『はい、私共に御用でございますか』
『ちと、物をたづねたいが、あの長谷の觀音の籠堂と申すのは、誰が行つても差つかへないか』

『えゝ〳〵、差つかへのある段ではございませぬ、人の世で見離されたものを、お拾ひなさるのが觀音樣の御利益でございます』
『左樣か、忝ない』
僻んで取れば、この巡禮の返答ぶりも癪にさはる、おれの今日の運命は自ら求めたもので、おれは落魄れても氣儘の道を歩いて居るのだ、まだ神佛におすがり申して後生願うやうな心は起さぬ。龍之助の心には、充分の我慢が根を張つてゐるけれど、差し向き今の身に宿を貸して呉れる處は神社佛閣の廂の下の外にはありさうもない。それで、今通りかゝる巡禮に長谷の觀音の籠堂の事を聞いて見たのであります。
夕暮の色は、奥の院から下りて來る、黑崎出雲村の方は夕煙が霞のやうになつて、宿に迷ふ初瀨詣りの笠が、水の中の海月のやうに浮

動する。聞かでたゞあらましものを今日の日も初瀬の寺の入相の鐘ば、今し、九十九間の階廊を下りて、龍之助の身にも哀れを囁く。

わが子を椽から蹴落して出家入道を遂げた西行法師が、舊愛の妻にめぐり合つたといふ長谷寺の籠堂。龍之助は兎も角も此處で夜を明かさうとして其の南の柱の下に來ました。

大菩薩峠

（壬生と島原の卷終り）

大菩薩峠

（三輪の神杉の巻）

中里介山著

一

大和の國、三輪の町の大鳥居の向つて右の方の、日の光を嫌つて影をのみ撰つて歩いた一人の女が、それから一町ほど行つて「藥屋」といふ看板をかけた大きな宿屋の路次口を、物に追はれたやうに駈け込んで姿をかくします。

よくはわからなかつたが年は、たしか廿三から七までの間、あまり目立たないつくりで、伏目に歩みを運ぶ面には、やつれが見えて何となしに痛はしいが、それでも、摺り違つたものを一たびは振返らせる、鳥居の兩側には何れにも茶屋がある茶店のない處には宿屋が